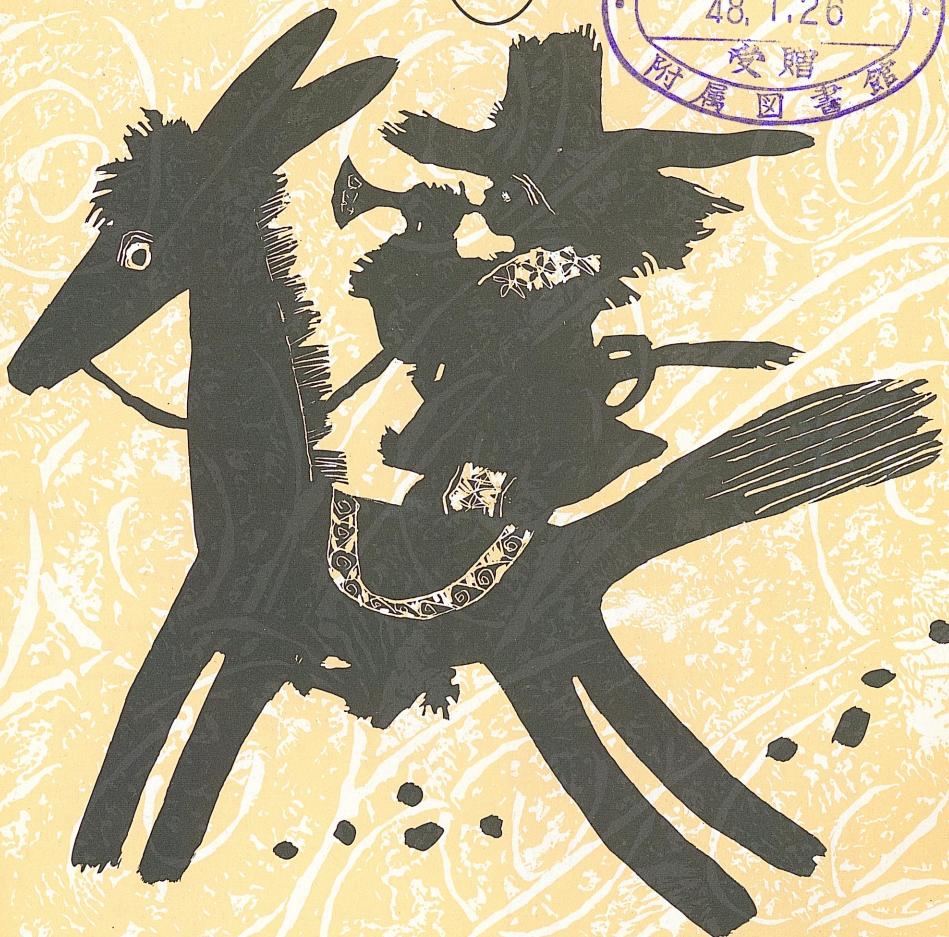


家庭・保育所・幼稚園

幼児の教育

3



第七十二卷 第三号 日本幼稚園協会

幼児教育界をリードする新書判シリーズ!! ノレーベル新書

フレーベル新書7

自然物のおもちゃ

新刊発売!!

滝田要吉著

360円

葉っぱや野菜、卵などを使って、子どもたちが創る動物やおもちゃ、昔から伝わる麦わら細工や草花細工など、おとなには郷愁を、子どもには自然を発見させる楽しい自然工作集です。

■好評既刊■

- | | | | |
|-------------------|-------|-----------------|-------|
| 1 リナはどうやって文字を覚えたか | …330円 | 4 楽しい遊び〈室内・園庭編〉 | …300円 |
| 2 保育者への一つの指針 | …360円 | 5 楽しい遊び〈伝承遊戯編〉 | …300円 |
| 3 対談・しごとと生きがい | …360円 | 6 楽しい遊び〈園外編〉 | …300円 |

豊かな保育の世界がここから始まる……



保育カリキュラム資料
〈全6巻〉 B5判 136頁 各巻600円
(送料 110円)

☆最新刊発売!! 5…遊び

☆既刊 1…春 2…夏 3…秋 4…冬
☆近刊 6…小事典

子どもは一時としてじっとしてはおりません。その一瞬一瞬を力いっぱい活動し生活しているのです。せっかく苦心して作り上げたカリキュラム表も、あつという間にくずされることもしばしばです。

そんなとき、いつ、どこででもすぐに役立つののがこの資料集です。あしたのカリキュラムのためのヒントを集めた、あなたのための保育ハンドブックです。

幼児の教育

第七十二卷 第三号



幼児の教育 目次

——第七十二卷 三月号——

表紙
カツト
斎藤信也
赤坂三好

©日本幼稚園協会
1973

倉橋惣三選集より

(4)

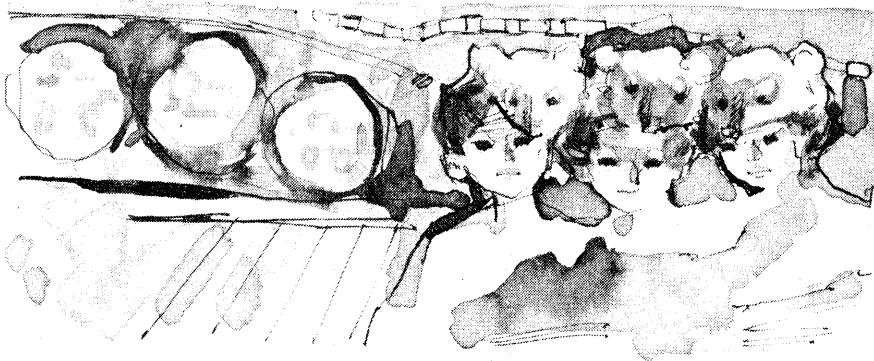
文化の中の教育(一)

「教えよう・教えられよう」と「学ぼう」ということ……原 ひろ子… (5)

日本幼稚園協会主催幼児教育講習会特集——その一

周郷 博… (10)





★講演

幼児時代における言語の形成··· 外山滋比古··· (11)
現代の子どもの意志・情性の病態··· 和田重正··· (33)

コマおとしの教育··· 安藤美紀夫··· (50)

動物と遊んだ一日··· 守永英子··· (54)

★子どもと動物··· (56)

私の保育··· 中村美智子··· (59)

幼児の観察研究—靴と幼児··· 津守 真··· (64)

無案保育

ま責自をまり立うあそ計てしいで対
同任分暮せまで。るう画目てる、を試みが平常説
志主かしんせる天いい、的こ幼稚園をやつるもしがりするもおり
で義らてがんととがはうあをととがはるらしてい
はへでい。いさ責任こるももしがりするもおり
あ？もるのもうま任といつておきましいいのり
りい人人しこでをがはて教立育ましいん。
までわがが非とも感出立育ましいん。
せすれああ常、なじ来案育ましいん。
。るりりにそくなたなをしょ。くこでます
。幼こ、まほの日いとししょ。ことから、ろ
稚としう、こ雇そでてう。これを仮に無案保育
園がれたら、といのるやい。しきを假に無案保育
保あが、つに人日なつくらて者かしに無案保育
育つ新しいなつ足暮らて者かしに無案保育
をたしき自いでしばいがしに無案保育
ごといあ由てなの、け、でですよ。い
いし保た主、い日そるは然何等の心構えも子供を集め申して
（倉橋惣三選集
第一巻 幼稚園真諦より）
つしましでもあると、い日なんもの保とる。すなわちめ申して反
義決したい人足狗さりまの心構えも子供を集め申して反
育りばへてちがいでもする日々の保とる。すなわちめ申して反
育されは案しとあをよかもちめ申して反
に考えるに足るなにか無、園りあをよかもちめ申して反

文化の中の教育

(一)

「教えよう・教えられよう」と「学ぼう」ということ



原 ひ ろ 子

1 はじめに

文化人類学という分野では現実の社会に入りこんで実地調査を行なって得られる資料が学問の基礎になっています。本稿では、私の限られた調査体験の中から、教育の問題について考えた事を書いてみたいと思います。

まず、調査に入るときは、対象となる社会において「その文化について教えていただく、その社会に住んでいいるひとりひとりの人の生き方について教えていただく」という「これで調査は軌道に乗ったのだぞ!!」と喜び、張り切る

下さる人のかたがたにも通じて、いつしか積極的に「教えよう」という態度で私に接して下さる人びとが多くなつてくるのが常でした。そして、こうなつた時点では、私は、下さる人のかたがたにも通じて、いつしか積極的に「教えよう」という態度で私に接して下さる人びとが多くなつてくるのが常でした。そして、こうなつた時点では、私は、「これで調査は軌道に乗ったのだぞ!!」と喜び、張り切る

こういう状況のもとで、私は、「教えよう・教えられよう」とする意識的行動は、人類にとって普遍的なものであらうと考へるようになつていきました。ヒトが未成熟のままで出生し、その後の体験の蓄積によって、やつと成人するという生物として与えられた条件が「教えよう・教えられよう」とする意識的行動を、人類に普遍的な現象とする基盤となつてゐるのではないかという説明も私には納得のいくものでした。

ですから、調査にあたつても、調査をする私の方に「教えられよう」とする意欲と態度があれば、「教えよう」とする行動をインフォーマントの方からひき出せるのは当然だという気持ちでした。そして子どもが海绵のように自分の生まれた文化の中の事象を吸収すること、私も、調査対象となつた社会のもつ文化を吸収したいと思いました。

さらに、研究のテーマとして、「特定の社会において、文化が世代を超えて、伝達される過程はどのようなものか?」とか、「個人が環境としての文化をどのように自分の中にくみ込んでいくのか?」というような問題を念頭におきながら調査を進めていた私は、その研究の一環として、大人や子どもの区別なく、「○○をあなたはどうのようにしておぼえたのですか?」それを誰に習ったのですか?」といった質問をする事にしていました。この質問の中の○○には、職業上の技術や日常生活の習慣から「生き方」など抽象的なものまで、いろいろな事象があてはまります。そして、日本、米国中流社会、カルチック・モンゴルのインフォーマントからは、その問い合わせに対する、かなりくわしい回答が得られるのが普通でした。こういう回答の集積それ 자체がその社会における個人の学習の過程の全貌を、伝えてくれ

るとは考えられません。観察や実験的なテストなどを用いて、インフォーマント自身の口から出た回答のもつゆがみやざれを確認しなければなりません。しかしこれら的回答は、少なくとも、個人が「私は○○を(誰々に)どのようにして習った」と意識しているかを示してくれます。人びとはこの意識を、たびたび自分の心の中で再確認したり、人との会話をさいに表現したり、ときには教えてくれた人に對して生ずる社会的義務を遂行したり、さらには、自分が人に教えるときに、教えられた事を反すうしたりしているのです。もちろん各個人が、自分のする事のすべてに関して「○○を(誰々に)どういうふうにして習った」という事を意識的に把握しているわけではなく、そこには無意識の選択は、本人にとって大事だと感じられている事、および、その社会において大事だとされている事などを中心に行なわれるようです。

次に、これらの社会では、たいてい的人が「私は、誰々に○○を教えた」という体験を意識しています。しかし、「○○をどのようにして教えたか」という事を意識的に説明できる人は減ります。そして、「○○をこのように教えてみたらAという現象がおこり、のように教えてみたらB

の現象がおこった」というような事まで説明してくれる人はより少なくなってしまいます。さらにより少なくなるとはい、日本人や米国人の中には、「泳ぎ方の考え方」(つまり水泳指導法の教育)など、「○○の考え方」を云云する専門家や非専門家が出てきます。

いずれにせよ、日本や、米国などでは、「人が人から教えられる」という事と、「人が人に教える」という事が可能だ(すべての物事に関してではないにせよ、ある種の事ないしは多くの事に関して可能だ)と考えられ、かつ、必要であると信じられているのです。何について教えられ、教えるかという点や、どのようにして教えられ、教えるのかという事については、日本文化、米国文化などにより文化差があるのですけれど………。

こういった具合に、私は、「教えよう・教えられよう」とする意識的行動は、人類に普遍のもの——つまり、どんな人間社会にも存在するものだと考えていました。ところが、これからお話を hearer・インディアンの人びととつき合つてみて、この考え方を修正するにいたりました。そして、「学ぼう」とする意識的行動は人類に普遍的といえるが、「教えよう・教えられよう」とする行動は、絶対普遍のも

のではないと考えたくなってきたのです。さらに、現代の日本を見るとき、「教えよう・教えられよう」という意識的行動が氾濫しきいて、成長する子どもや、私たち大人の「学ぼう」とする態度までが抑えつけられている傾向があるのではないかしらという疑いをもつようになりました。しかし、現代のような分業のすんだ技術社会である日本において、私たちの生活から「教えよう・教えられよう」という意識的行動を除いてしまったら、途端に日本文化は崩壊してしまうでしょう。けれども、同時に「学ぼう」という態度が阻害されていった場合、どういうことになるでしょうか。

こういった問題を念頭におきながら、しばらく日本をはなれて、私の hearer・インディアン調査の体験を書いてみたいく思います。

2 「教える」人のない文化

hearer・インディアンは、カナダ北西部のマッケンジー河と北極圏線が交差する地域に住む、狩猟・漁撈・採集民です。この人たちと十一ヶ月のあいだ生活を共にしているうちに、私は、ほんとうに驚いてしまいました。

猶は父親から息子へ、皮なめしは母親から娘へ、靈力のもち方については強いシャーマンから若い男女へ、英語の会話力は英語の上手な者から英語を知らない者へと教えていくのだろうかというのが私の初期の推測でした。

驚きは、一九六一年夏の三ヵ月にわたる予備調査のときから始まりました。総人口三百五十人ほどのヘヤー・イン

ディアンのうち、若者たちの中には英語を話す人もいます。

彼らに、「英語は誰にならったの?」と聞くと、「自分でおぼえた」という答えしか返つて来ません。「どういうふうにしておぼえたの?」と聞くと、「そりゃあ、しゃべってみるのさ」ということです。ムース（アメリカおおじか）を射止めて来た男に、「ムースをどうやって射とめるかを教えてくれた人は誰なの?」と聞くと、「え? 自分で上手になったのさ。初めてムースを射止めたのは十五歳のときだつたよ」といった具合です。ムースの皮をなめしているおばさんには「このなめし方をどういうふうにしておぼえたの?」と聞いてみると、またしても「自分でおぼえたんじやよ」という答えです。そして、誰も彼も「なんて馬鹿なことを聞くんだろう」といった調子の考え方なのです。

私は、「こういう考え方は、今まで聞いてみたインフォ

ーマントの個人的な性格からくるもののかしら、ちん入者のような見なれぬ私に、好奇心をもつて接触してくるのは、ヘヤー社会の変り者かもしれない。もつといろんな人に聞いてみなければ」と考えました。そして、一九六二年六月から六三年一月にかけての本調査のときにも、この質問をつづけてみました。英語で聞くときには、「From whom did you learn how to?」とか、「Who taught you how to?」とかいう表現を使うわけですが、この質問はヘヤー語には翻訳不可能だということがわかつてきました。「だれだから習う?」「だれだれから教えてもらう?」という表現がヘヤー語に見つからないのですから、ヘヤー語で聞くときは、「どのようにして○○をおぼえたのですか?」「とか、「どのようにして○○ができるようになったのですか?」というような表現を用いなければなりませんでした。しかも、「どのようにして○○ができるようになったのですか?」というような表現を用いなければなりませんでした。しかし

も、それはたいへん無理なヘヤー語の構文となってしまします。そして、インフォーマントから返つてくる答えは、あいだらば、「自分でおぼえた（I have learned by myself!）」の一点張りなのです。

大人の使うおのを上手にふりおろしながら、丸太をこま

かいたきぎ用に割つている五歳の子どもにむかって、「どうやつてそれをおぼえたの?」ときくと、彼女は「自分でやつているのよ」と答えました。私のへんなへやー語が通じなかつたのかもしれないと思って、そのあたりにいる兄や姉や年上のいとこたちに「だれがおのの使い方をあの子に見せたの?」と聞いてみると、「あの子が一人で遊んでるんだよ」と答えられてしまいました。

こういう質問をくり返すと同時に、彼らの生活をつぶさに観察していますと次のようなことがわかつてきました。

ヘヤー・インディアンの文化には、「教えてあげる」、「教えてもらう」、「だれだれから習う」、「だれだれから教わる」というような概念の体系がなく、各個人の主觀からすれば、「自分で觀察し、やつてみて、自分で修正する」ことによつて「○○をおぼえる」のです。

自分がまわりにいる大人や友人やいとこきょうだいたちの獣のしかた、皮のなめし方、火のつけ方、まきの割り方、カヌーの作り方、笑い方などをじっくり觀察しているのです。男の子は、獲物を射止めて帰つた猟師が微に入り細にわたつて語る狩の自慢ばなしに食い入るように聞きほれます。また、自分が下手な射止め方をしたら何がおかしいか

という点が、噂となつて自分の耳もとにとどいて来ます。

女が皮をなめしているとき、それをながめている人たちが、「液には何を入れたの?」といった質問もしますし、「肩の部分は固いねえ」といったようなコメントも発します。

しかし、批評する側は、それによつて当人に注意を与えられるわけではなく、当人も「ではどうすればいいのですか?」などと聞き返したりはしません。批評する側は、「それを当人がどう受けとめるだらうか、私の批評が当人の次の獣や皮なめしの作品にどう反映するだらうか」などという関心を持つてもいないので。ただし、批評や噂を聞いている獣や皮なめしの当事者は、それによつて、自分のやり方に修正を加えたり、新しい工夫を試みたりしていくのです。

もちろん、私が外から眺めたとき特定の個人(X)のくせや、やり方が当人(Y)に強い影響力をもつて伝えられていることもあります。しかし、XもYも、そのことを意識していないのが普通で、二人とも、「Yが自分でおぼえた」と思つてゐるのです。こういう社会では、「誰かに教える」ということすら考えられないことなのです。——つづく——

日本幼稚園協会主催 幼児教育講習会特集——その一

外山先生の話の前に

周 郷

博

これから四日間、皆さんと一緒に、日本の幼児教育というものを、日本の未来について考えなければならないわけです。私は来年の三月に園長をやめますから、私の最後の年です。日本も、田中内閣になって大分変わるだらうと思いますが、私の気持ちでは、今の日本は一生懸命に考えてないと思います。何かいいかげんに考えてる、そして学校というものに頼りすぎていると思います。中国人は今、一生懸命にやつてるそうです。周恩来の一生懸命さとはちがうのがあるんだと思います。そこが日本人には足りないような気がするので、この四日間、今までと違った精神の状態に、皆さんと一緒に入りたいという気があります。

外山さんが一日目に大変いい話をしてくれることになつてないので、一生懸命に聞いていただきたいと思います。一生懸命というのは、お義理じやないんです。人のために一生懸命でありますような、ボーズをすることじやないんです。一生懸命に生きなきやならない、それはあなたの方の義務です。ヨーロッパで考えたことですけれど、ヨーロッパには“義務”という考えがあるので、日本には“責任”ということしかないと思います。責任というのは他人との関係でごまかしがります。もと基本的には、義務ということはあるはずだと思います。義務を果たすということは、他人とのかけひきなんかを越えていふことです。そのつもりで聞きたいと思います。

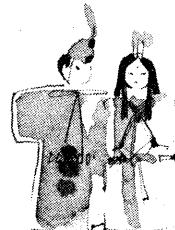
プログラムにはありませんが、前の大石環境庁長官が四日目に来てくれます。私は四日目に話をする予定で、大石さんの話のあとをうけて話をするようになっています。

今日は一日目で、外山滋比古さん、この大学の英文学の先生ですけれど、外山さんみたいな人が幼児教育に足をつっこみます。

◇講演◇

幼児時代における言語の形成

外山滋比古



はじめに

今日は私が考えております言葉の問題を幼児の時期に限つて話してみたいと思います。

私は教育が学校の中で行なわれるという社会の常識はそろそろ見直されなければいけないよう思つておりましたが、最近幼稚園を中心とする幼児教育というものが非常に注目されました。それは結講ですけれども、どんなに幼稚園を充実整備いたしましても、家庭における言語教育、言葉に対する関心が、現在より少しでも後退するようなことがあれば、これは将来の世代に対して由々しき大事件であります。幼児における言語形成というものは、あくまで家庭の母親による言語の教育というものと協調し、調和したところにおいてのみ、力を發揮

するのであるということを、はじめにおことわりしておきたいと思います。

言語教育の重要性

それで、ごく小さい子どもにとつて、言葉が、どれほど重要であるかということを端的に示す話を最初にご紹介したいと思います。

一つは、二十世紀になりましてからずっとアメリカでは、小学校就学時におきます白人の児童と黒人の児童との間に知能指数が約十七、十八～二十ぐらい、これは、大変な差でありますけれども、知能指数における平均差がありました。これは、人種差別を主張する人たちには、黒人の人種的劣等を、何よりもはつきり数字であらわすものである、というふうに悪用されて

きまして、多くのアメリカの社会の人たちも、あるいはそうであるかも知れないと考えるほどに、この知能指数の差が黒人の社会的地位に、かなり悪い影響をおよぼしてまいりました。これに対して、最近、果たして、ほんとうにそういう人種的な知的劣性というものが、黒人の中にあるだろうかということを疑つた社会学者、言語心理学者があらわれまして実験がおこなわれたのです。教育において、実験という言葉は大変不適当でありますけれども、この際は、心理学、社会学の人たちの仕事でありますから、実験という形を取つたようであります。

どういう実験かと申しますと、生まれてから小学校に入学するまでの間の、家庭における母親を中心とする親と子の関係を比較、観察した結果、一番ちがうところは、白人の家庭では、非常に早い段階から、言葉を十分に使つてしまつてゐる。たとえば物をこわした子どもに対しては、なぜ物をこわしてはいけないかということを、親は子どもにくどいくらいに言つてきかせる。ところが、黒人の家庭においては、そういう場合にあまり言葉でいろんなことを言わないでお尻をぶつたたく、といふだけであつてしまつてしまつ。これは、言語という観点からいたしましても非常にちがいます。そこで実験をした人たちは、黒人のおかあさんたちに、白人の家庭で行なわれているようなし

つけをするように指導いたしました。そして少なくとも言語的にみて、白人家庭と黒人家庭の差をなくしてみましたところ、そこで育つてきた黒人の子どもは、小学校就学時におけるかつのような知能指数の差がほとんどなくなつてしまつたという事が報告され、従来の黒人劣等説というものが大きく後退するということがありました。これはおそらく、言葉だけの問題ではないと思いますけれども、言葉に代表されます幼児の教育というもののあり方を、まざまざと示してくれるものではないかと思うのであります。

もう一つは、実際私どもが頭がいいとか、頭が悪いとかいうふうに言つておりますのは、親から遺伝している部分も全くないとは言いませんけれども、きわめて多くのものが後天的なものであるということを示す事例であります。

アメリカのいわば低所得階層といわれる人たちの住んでおります俗に言えばスラム街——で、白痴に近いような母親をあらかじめ調べておきました。こういう母親が子どもを生むということがわかりますと、その生まれた瞬間からその母親の手元を離しまして、大学の小児科と教育学の研究室みたいな所、育児チームという所へ一日に何時間かずつ通わせます。そうしてなるべく母親による教育の要素をへらしますと、三歳くらいにな

りますと大抵は、普通の子どもと全く同じ能力をもち、小学校に行つてもほとんど母親の遺伝という問題がおこつてこないそうであります。一方そういうことをしないで、知能がおくれている母親から生まれた子どもを自然の状態にしておきますと、やはり知能のおくれがだんだんあらわれてくる、ということが報告されております。

こういう例をみると、私どもが頭がいい、悪い、素質があるとか、ないとかというようなことをいいますが、大体においては後天的な要素であると考えられるのであります。私たちは、そういう自分たちの努力の足らない面を人間の力でどうしようもない運命とか、先天的な能力とかいうものに責任を転嫁することによって従来教育の失敗をいわば糊塗してきたのではないかと思うのであります。

小さい時に一番決定的に大事な頭をよくする、素質を高めてくれる教育はどうも言語が中心らしいのであります。その言語ですが、今まで私どもが考えてきたような意味で言語が重要なのではなくて、われわれが人間である、まさにその人間らしさというものを育てているのが、言語であるということであります。そこで、過去の人間教育、過去の幼児の教育というものはしばらくおあずけにいたしまして、未来に向かつてこれからの人間を育てる本当の意味の教育というものは、言葉に関するところをどうすることを考えていったらよろしいかということを、

皆様方と一緒に考えていただきたいと思います。
こういう問題をなるべくおちこぼれなく考えてまいりますのに、いつ、どこで、誰が、何を、どういうふうに、なぜという六項目に分けまして考えてまいりたいと思います。

言語教育における“いつ”

最初に“いつ”的問題ですが、言語には限りませんけれども、教育というものは先ほど申しましたように学校でやるものだという幻想が非常に強いのであります。学校に行くまでは、教育は始まらないというものが素朴な一般の家庭における受け取り方ではないかと思います。しかし、生まれおちたその瞬間から実は教育が、人間としての教育が始まるわけであります。時期は、早ければ早いほど、よろしいと思います。病院でお産をして、初めての一週間か二週間は、看護婦さんに預けっぱなしで足の裏に番号を書いてもらつてあっちこっち運びまわされると、そういうようなことは、大きく言えば、その子どもの一生に相当影響を及ぼすかも知れない経験になるかもしれません。

それで大きくなつてからどうもうちの子どもは親のことを考

えないとか、親を捨てる子があるとか言う親がおりますけれどもはたしてほんとうに子どもを人間らしく育てたと言えるかどうかわからない親に、子どもを批判したり、子どもの愛情を疑つたりする資格はないと思うのであります。ことに生まれて間もない間は子どもにとって全く自意識というものがありませんし、将来大きくなつてから、生まれた瞬間その時のことと意識している人間は全くいないのでありますから、親は割合無責任に、どうせ覚えていないんだから、わからぬんだから、何をしてもいいとは思いませんけれども、いくらか心を許しているところがないとは言えないと、思います。しかし、

その実は全く物心がついていないその瞬間に全く無色で何も書いてない子どもの頭の中へ、最初にどういう一本の線をひくかということはやはり、その子どもが生きている間どうしても消されない大きな運命を決定するかも知れないのでです。

文化人類学でこういうことを言つております。生まれてすぐ母親の母乳で育てる民族と、母親の母乳を与えない民族の間にはかなりはつきりした民族性のちがいがあると教えています。母乳で育った民族は大体において楽天的、調和的であります。母乳を与えないで育てる民族は主として破壊的でペッシミステックで、悲観的である、と指摘されています。ですから物は

言わなくとも、あるいは目が見えなくても、子どもにこの世に生まれてきて最初に、何を感じさせ、何を見せ、何を聞かせるかといふことは、大学にきて五年や十年かつてもどうにもしようのないほど大きな影響があるかもしれません。そう思えば、教育というものの順序を逆転しなければいけないんではないかと思ひます。

なぜ早ければ早いほどよろしいかと言うと、人間が新しいものを習得する能力は、頭の中に先入観念、先入経験、先入知識というものが少なければ少ないほど強烈に迅速に行なわれるからであります。ある一定の時期を過ぎてからですとせつかく訓練やしつけをしても全く効果をあげないという例が、これはやはり典型的な話がありますので、これをご紹介すればいいかと思います。

アヴェロンの野生児というのです。なんでもオオカミに育てられたらしい人間の子が発見されまして、年のころははつきりしませんけれどもおそらく十一～三歳くらいであろうと推定されました。もちろん人間の言葉を全然知りません。それでたいへん熱心にこの子どもの教育をしました。言葉を教えないまま人間らしくならないわけですから二年にわたつて一生懸命言葉を教えたんですけれども、何とその二年間に覚えた言葉が單語

三つか四つしか覚えなかつたのです。それでもなお教育を続けますと何か精神的な影響ではないかとも思われる節もあるんですけれども、とうとう亡くなつてしまつた。

この例のように十歳をこえるまで言葉を教えないで放つておきますと、単語三つ四つを二年かかつてまだ完全に覚えられなくなつてしまふ。しかも結局において、生きていられないほどの打撃を受けるらしい。ところが普通の状態で育つた子どもは二歳になれば言葉を発するようになります。やはり言語習得の

能力というのは、頭がからっぽであればいつでもスイスイとはいっていくとは限らないのでありますて、たとえば十歳をこえたりしますと、どんなに頭の中がからっぽであつても、さきの例のように努力をしても全く効果があがらない、ということは、もはや人間になるには手遅れであるということあります。人間らしくするためには生まれたその瞬間から真剣な教育の努力が必要であります。それをおこたりますとアヴェロンの野生児のようにではなくとも、人間としてどこか欠けたところがでてくるはずです。

私どもは人間としていはつておりますたけれども、生まれた瞬間からの人間としての教育を本当に考えておらなかつたという点においては十分人間的ではなかつたのです。人間が類人猿

と決定的にちがうのは、生まれた時からの広い意味における教育というものが言語を中心として行なわれているということにあるのです。

人間らしいところはコンピューターのような仕事をするだけの人間ではない。ただ自然のおもむくままに放浪している動物でもないところに、人間の人間たるゆえんを求めるとしますと、無意識、無自覚に行なわれている言語の教育ということになります。

そこで、幼児を仮に三つの時期に分けて考えますと、第一の時期は幼稚園にはいってくる前の年齢、ゼロ歳から幼稚園の入園時までを前期といたします。それから幼稚園の時代、この年齢層を中期といたします。小学校一、二年、低学年をかりに後期といいたしますと、言語を吸収していく力は前期が圧倒的に強いようであります。といいますことは、人間は年齢と共に個性というものが固まってまいりますけれども、この陶冶性、変わるべき能力、新しいものを習得する能力は、個性と反比例する。個性の強い人はあまりたくさんのものを受けつけないという。ほとんど本能的な反応を示す。新しいものがはいってくるのを拒否する。そういう拒否がほとんど働かないのは生まれてから言葉を発するまでの一年か一年半、二年の間。この期間のことは

物心ついてから全く記憶になくなってしまう。どんなに記憶のいい人でも最も陶冶性の高かつた、一番活発な学習をしていた時期、幼児前期には記憶が皆無に近いのです。

そこで、私どもは、教育というものは要するに個性をつくつていくものだと思いますけれども、個性ができますと、こんどは教育はできなくなってしまう。教育ができるというのは個性がないからであります。個性があると、はじめから個性があることは考えられませんけれども、何らかの意味で子どもが個性を早く持ちすぎますと、その小さな個性なりに固まってしまいます。そこで、前期、中期を通じまして、幼児の言語というものを考える場合、あまり小さな目標で教育いたしますと小さくまとった個性ができてしまう。そうしますとあとあと教育の効果が低下するのであります。現に非常にすぐれた幼稚園、小学校、を出てきた都会の優秀な生徒が、後年になつてははだ成長、発達が遅れるという皮肉な現象がおこつていますが、これは教育で早く個性をつけることを行なつたために、十分な裾野の広がりを持たないで高い山をこしらえようとするようなもので、ある一定のところで高さのないということになつているのではないかと思います。

したがつて、教育を何か一つの小さな型の中にはめるという

のは、教育に名を借りた人間の破壊だと思います。教育という言葉を使いますと、いわゆる小さな目標に向かって人間をい型に押し込めるような傾向がありますけれども、そういう教育となくこれに代わる言葉はありませんので教育というのを使うほかありませんけれども、先ほど人間が生まれた瞬間から言語を中心とする教育がはじまるとき申しましたけれども、実は生まれた瞬間では既に遅いと言えるかも知れないのであります。なぜかと申しますと、これは昔の人が「胎教」ということを言っています。「胎教」というのは、お腹に子どもがいる時期に母親が情操的その他的一面で非常に注意しなければいい子どもが生まれない、と教えていたようです。母親の部屋に、能面がかかっているといい子どもが生まれるというようなことを文字通り受け取るのは現在のわれわれではやや困難でありますけれども、しかし、母親になる人の心構えも含めて胎教だと考えますと、現在最も欠けている一つは現代的な胎教だと思い出します。胎教というものが迷信じゃなくて長い間一般に信じられておりましたのは、子どものしつけ、教育というものが生まれた時では既に遅いということを経験によって多くの人が知つていたからではないかと思われるのです。

言語教育における“誰が”

一、母親と協力者

ここで“誰が”的問題がはいってこなければならないことにあります。

母親が胎教を、もし胎教に相当するものを現在において考えるとすればそれはどうのことになるでしょうか。

幼児期前期の言語の教育は、当分の間母親がやるほかはない。それから、中期、幼稚園にはいることになりますとこれは母親と、母親以外の人、経験のある母親ですと母親が兼ねることができると思いませんけれども、最近のような母親の能力が怪しくなってきた現状におきましては、協力者、ないしは援助者というものが必要であると思います。かりに援助者というものを皆様方のように幼稚園の先生方ということにいたしますと、中期は、母親と幼稚園の先生です。後期でもやはり、母親の役割は後退いたしまして、小学校の先生によつて肩がわりされる部分があつてまいります。

しかし、母親による言葉の教育が全く欠けた小学校低学年の児童の生活は、考えられないと思ひます。前期は、いたしかた

ないので母親にまかせざるを得ない。次の幼児の教育では母親に協力する人がほしいのです。この母親ではダメだという場合には母親にかわる人、昔で言えば、乳母、めのとというものが、現代の社会においてどういう形にかわらなければならないのかは別として、生まれてくる命のために必要であるというふうに考えます。この問題は、今の社会や教育のいわゆる専門家と言われる人たちが十分考えてない問題でありまして、当分の間はおかあさんの自覚に待つほかはあるまいと思われますけれども、幼稚園の先生方が、もし子どもをりっぱな人間に育てようといふ情熱がありならば、幼稚園にはいつてくるまでに決定的についてしまういくつかの問題点というものを少しでも少なくするという努力を、やはり惜しんではならないと思います。

おかあさんに対する幼稚園の先生による協力が行なわれれば、幼稚園にはいつてきた子どもに對しては、今度は家庭の母親の幼稚園への協力がうまくいくのではないでしようか。子どもが家庭にいる間は、全く幼稚園は関知せず、幼稚園に行かせてしまえば、幼稚園にまかせっぱなしにしたら、子どもの教育に非常な断絶ができる。家庭から突如として幼稚園にはおりこまれるとまつたくの別世界が待つてゐる。氣の弱い子どもはその衝撃で変になるでしょう。少し子どもを乱暴に扱い過ぎると思

います。

将来幼稚園へ預かるということがわかっている子どもなので、すから、地域社会における母親に対しての幼稚園の育児に関する啓蒙あるいは、協力を行なうのです。そして子どもが幼稚園にはいったら、母親の協力を得られるようにするのです。母親の手を離れると、いっぺんに社会的な集団の中へ投げ入れられますが、その衝撃は、一種の乱暴な離乳のようなものです。その衝撃が、あとあとまざい結果をひきおこすようなことは問題です。たとえば、学校恐怖症というのも、幼稚園の入園時における衝撃が関係しているかもしれないと思われます。ですから家庭と幼稚園との一貫性というものは、ただお題目としてではなくて実際問題として大切なことについてもつともっと認識を高める必要があるうかと思います。

二、日本の母親の愛情

母親は前期の教育のいわば主任であるわけでありますけれども、それがどうもいろいろ問題があります。母親の愛情表現の仕方には、民族によつて違いがあるようになります。従来日本の母親は、愛情こまやかな点においては、世界に冠たるものがあったのではないかと思います。日本人が、優秀民族であるとすれば、育児というものが非常に献身的な母親の愛情のも

とに行なわれていたことときつてもきれない関係にあるのではないかと思います。ところが、最近は日本の社会全般が西欧化してまいりまして、そういう愛情表現というものは、むしろ否定されるべきものだという考え方が、若い女性、教育を受けた女性の間に広まつてしまいまして、母性愛にブレーキをかけるような傾向がみられるように思います。今までの母親は教師としてほとんどゼロに近いと思いますけれども、このゼロの教師がなおかつ実際にすぐれた育児ができたのは、まさに母性愛のこまやかさに救われていたと考えられます。もし、従来と同じように、教師としての能力がおそまつでありながら、愛情だけ減るようなことがもしあれば、これは確実に子どもの能力を減らしてしまうことになります。

生まれた瞬間からおかあさんが何という言葉を発するか、ということをおかあさんが記録をしているということは、皆無であります。小さいときからの写真をとつて記録するには珍しくなりましたけれども、人間の言葉として最初に言つた言葉が何であったかということは、おかあさんは自覚していない。これでは、言葉の教育者してまず失格でありましょう。赤ちゃんの寝ている部屋にテレビがつけ放しにしてあって、おかあさんがどこにいるかわからないという場合、子どもは、

この世界ではあれが言葉だという錯覚をもつかもしれません。育児がある程度すすむまではテレビを消さなければならないと思います。それは消すか消さないかの問題ではなくて、母親が自分は言語教育の主任教授であるという自覚がない段階において、

テレビからの人間の声らしきものを聞かせるのは、はなはだ軽率であり不注意であり危険であるといわざるを得ません。ネコのなき声、犬のほえ声というものは、子どもにとつてあまり言語教育の妨げになりませんけれども、テレビの言葉は、生まれたばかりの赤ん坊に聞かせるためのものではなくて、大人を対象にしてしゃべってるのありますから、そういう言葉を聞いて赤ん坊が育てば、とんでもないことになる可能性は十分あるわけであります。

しかし教育ママだといわれるお宅に行ってみると、まだ言葉のはつきりしない子どもがいるのにテレビをつけて、おかあさんはテレビに夢中になつていて。それなのに子どもが幼稚園にはいるときになると急に幼稚園選びに目の色をかえる。それまでやつてきたことと、幼稚園を選ぶときのあわてかたとどこで結びつくか、はなはだ不思議であります。ほんとうに子どもの生活をみつめてきたおかあさんなら、どういう基準で選ぶかは別として、幼稚園を選ぶことは当然あつていいことだと思います。

そういう考え方の方は持たないで、満員電車にぶらさがつて、会社へのつとめに出られ、社会に出られ、それが生きがいだといふ。家庭にはいつてしまふのは、生きがいのことだときめ

ます。しかし、数年もテレビの騒音の中に子どもを放つたらかして平氣だつたおかあさんが、幼稚園に大きわぎするのは明らかにおかしいのです。

三、現代女子大生気質

そういう母親の意向が何か教育における受け手の優位というようなことで、先生方の自由な活動をこう束するようなことがあれば、子どもにとつて不幸はいつそう深くなると言つても過言ではないでしょう。女子大生の多くが女子大であることを恥じております。男子学生がいないのをもの足らないと思つています。これは考え違いだと説いているんですけれどもあまり引き目がありません。これは、現在のまちがつた傾向を端的に彼女たちがあらわしてるのであって、彼女たちだけを責めることはできません。女性にとって何をすれば一番人間らしい、価値のあることができるかと申しますと、自分の子どもをその能力を十分生かしきれるような人間に育てることだと言つているのです。一人だけでも、二人でも、三人でも育てれば、それで確実に人類に対する責任は果たされるのであります。

て、すこしでも男のようにしてみなくつちゃというのが、女性の理想のようあります。今までは、男は偉いんだというような考え方が通用していました。男の人と同じようにすることが、女性としての向上につながるという非常に遅れた考え方立っています。大学は男がいる、そこへも女がはいしていくのがいい。女だけの大学なんていただけないという。

四、無意識の教育——そのむずかしさ

従来のおかあさんの方が、無意識ながら非常にむずかしいことをやっていたと思います。無意識でできることは、やさしいと思うのは大まちがいで、現におかあさんたちが、愛情に導かれてやつていらっしゃる生まれたばかりの子の教育というのは、案外幼児教育の専門家よりも、はるかに高い無意識な活動であるということは言えるのであります。

しかし、無意識というものは、もしまちがった場合は、これは、チェックすることができない欠点があります。意識的ですと、ほとんど無意識では完全に行なわれていることが、かえってなかなかうまくいかないということはあります。しかし、意識的な場合だと訂正がきくのです。たいていの母親は生まれたばかりの子どもを育てますのに、愛情によつて育てるわけですけれども、愛情というものは母親であれば、だれでも最初から

存在すると言えるかどうかについて疑いがあります。愛情といふのも、やはり訓練によつて育てていくべきものではないでしょうか。人間としての愛情はやはり、育てて成長させていくものだと思います。親としての愛情は母親が一生懸命に育てていくものだ、という考え方もないような母親が、子どもを育てましても、当然無意識的教育はうまくいかないでしょ。

昔の人は、このうまくいかなかつた例を総領の甚六とか言いました。母親が未熟で愛情が不完全。したがつて子どもが知的な栄養物として受け取る言葉についての用意不十分。こういう状態で育てられる子どもは、最初に申しあげましたアメリカにおける例などを参考にいたしますても、知能の遅れがあつても不思議ではないであります。昔の人が甚六と言つていたのは、やはり当たつてゐるであります。昔の人は、たくさん子どもがおりましたから、ひとりは失敗しても二人目からうまく行けば育児は成功だったとしてよいのです。しかし、最近のように、子どもが一人か二人で、もし失敗しますと、たいへん高率の失敗になります。ですから、昔のように一人を育ててみてうまく行かなかつたから、今度はこれにしましようといつて、だんだんうまくなつて行くというふうなのんきなことは、現在では許されないのであります。そのためには、新しい胎教をおこして、最初の

子どもから確実に成功してもらわないと困ると思います。

五、幼稚園としてはどうしたらいいか

もし万一母親が、初期の教育に失敗して幼稚園に入ってきた子どもを、幼稚園ではどういうふうに扱えばよろしいのか。母親のやり得なかつたことをやりなおすのは、全く不可能ですかなら、これはできない。しかし、もし何らかの形でおかあさんにまだできることが残っているならば、幼稚園とは別に、おかあさんは家庭でこういうことをして下さい、といっておかあさんに一種の処方せんを渡す必要があるうかと思われます。

それには、幼稚園の先生がこういう問題に関してかなりはつきりした意見をお持ちでないとできないと思います。幼稚園の実際の教育にあたってらっしゃる大部分の先生は、結婚前の若若い女性であります。こういう方のお姉さんとしての役割と効果は、大変大きいものだと思いませんけれども、幼稚園がごく若い方だけで運営されてはすこし困る。皆さんを前にして失礼なと言われるかも知れませんが、幼稚園はぜひ生涯教育でやつていただきたいと思います。先生方が一時は幼稚園をおはなれになることがあっても、必ずまた幼稚園に帰ってきていただきたい。ご自分のお子さんをお育てになつた経験をもとにして、もう一回幼稚園で今度は母親も含めて教育をしていただきたい。

幼稚園の先生の平均年齢が、三十歳の真中ぐらいということになるとよいと思うのです。幼稚園の先生は決して若いときのいろいろご経験なさることはこれから皆さんが自分のお子さんをお育てになられるとき、非常に参考になるだろうと思います。ご自身のお子さんをお育てになつた経験というものが、次の幼稚園の教育には大変なプラスになるようにしていただき。そういう点で私は、幼稚園の教育は、先生にとつても生涯の教育であつていただきたいと思うのです。

そして、幼稚園の先生方に母親の代理として母親がし残した仕事をなるべく早く有効に行なつていただきたい。それは、どういうことかと言いますと、言葉というものに対する考え方を改めていただきたい。言葉に対する考え方は教育を受ければ受けれるほどせまくなる。そういう小さな言葉ではだめなんです。おかあさんが子どもに与えなければならない言葉は、ちょうど母乳のようなもので、一見何の変哲もありませんけれども、総合栄養を含んだものです。母乳的な言葉というものは母親の言葉、母なる言葉であります。英語で母国語のことをマザー・タング(mother tongue)と申しますけれども、これは母の舌ということです。私どもが一生の間使います母国語は、比喩ではな

くて、ほんとうに母なる言葉で大地のようなすべてのものを成長させる言葉が、マザー・タンゲのほんとうの意味ではないかとこのごろ考るのです。

このマザー・タンゲに当たるものが、もし幼稚園に入つて見た子どもに欠けているとすれば、これが将来大きくその子どもの成長にひびくことは明らかであります。なるべく早くそれを補充することあります。それはただ字が読めるとか、書けるとかいう他愛のない末梢のことではなくて、言葉のエッセンスみたいなものを受け継いで持つてあるかどうかということを見

きわめていただこうことです。幼稚園に入った子どものそういうことを注意して下されば、子どもたちはその幼稚園の先生を一生の師と仰ぐであります。

私のまわりに現にそういう友だちがいまして、その友人を大変うらやましいと思います。その人は幼稚園の時の先生が亡くなられたときに文集を作つたりして、非常に献身的な働きをしました。その人は何か問題が起きたと、あの先生ならどう言われるかなということをいつも考えたそうです。ほんとの先生がその人には幸いにも幼稚園にいらつしやったということであるわけです。どうせ学校に行く前のことなどと軽い気持ちをもたれずに、幼いときの教育がどこまで達するかその行きつく先

がどこであるかを見きわめるおつもりになつていただきたい。

大学に入つてきますともうかなり陶冶性が失われて处置なしであります。が、幼稚園あたりですと、あつい鉄みたいなものでまだどうにでも曲がる。そういう点で最も教育の可能性が高い時期にすぐれた教育をすることができれば、それからさきの教育をやめてしまつてもかまわないではないかということすら考えるのであります。

言語教育における“何を”

一、はじめに——全人間的教育——

それで次は、‘‘何を’’ということですが、これは簡単に申しますと、年齢が低ければ低いほど、生活の全域、見るもの聞くもの全部教育でありますから、何か教育というわく組みをこしらえて、教育者だけが教育を行なうのだという考え方をまず大人の方で取り去る必要があると思います。ことに、幼児前期の母親の教育というものは全く無意識で行なわれておりますけれども、無意識に行なわれるということは生活の全域を含むという点ではこの条件を満たしているようあります。子どもは空気を吸うように、そういう教育的要素、たとえば言葉を中心とするものを吸つて、そして育つていくのであります。し

かし、やはり教育は家庭の外に出してみる必要があります。日常性をあえて捨てることが言語教育にとつても、人間教育にとつても大事なことでありまして、幼稚園教育がこの非日常性の中で行なわれなくてはならない部分が少しあります。一人だけではどうしても生きしていくことのできない社会的因素というものは、この家庭における日常からいかに離脱できるかということころにあると言つてもよいのです。この家族離脱を乱暴にやりますと、先ほど言いましたように、不注意な離乳のような衝撃を子どもに与えますから十分注意が必要でありますけれども、日常性を非日常性に移行させていくことは大変重要なことだと思います。家庭におけるしつけと、幼稚園、学校での教育との関係は、ちょうど車の両輪のようなものであって両方なければダメなのです。もし学校の先生が重視されるあまり家庭にまで非日常性をもちこむようですが、いわゆる優等生ができてまいります。非日常性すなわち試験、テストなどには非常にいい成績をとつて頭のいい子どもであるような感じを与えますけれども、人間としての広がりとありますか、活力と言いますか、力の欠けた子どもになります。大体若いうちは、そういう非日常性の人工培養的な人間の方が早く進歩しますので学校の成績もよろしいし、いわゆる優等生になります。しかし、もう少し広

い目で見てみると、どこか人間として魅力が欠けているのです。

私たちには昨年、旧制中学校卒業三十周年同窓会をいたしました。昔の友だちと夜おそらくまで話したんですけど、話してみてああここにも人生があるんだなというしみじみした余韻を残した友人は、考えてみるとみんな中学校でやめてしまった友だちであります。なぜ上の学校へ行つた人間がつまらなくなるのか。ほんとうに、教育の欠陥というか、恐ろしさを感じました。学校教育では、ある程度非日常性の中の知識というものですぐれた能力を示す必要があるわけですから、そういうものでのみ、人間がほんとうにすぐれた人間なんて考えることが、非常にまちがいであると思うのであります。なぜ学校の試験がよくできると人間としても価値があるのか、そういう点をもう一度素朴に問い合わせる必要があるよう思います。

もし、人間の価値を大学卒業時において判定すれば、今のような傾向もあるいは肯定されるかも知れません。けれども、その死ぬ瞬間まで歩みをやめない、成長することをやめないのであると考えますならば、小さな意味における優等生や秀才をつくることが、きわめて残念な教育ということにならざるを得ないのです。やはり小学校以前の教育におきましては、なるべ

くそういう非日常性に片よつたような生活の中へ子どもを追いやらないようにしたいと思います。もちろん私も非日常性が必要だということは認めますけれども、その比重には、かぎりがあるべきだと思います。たとえば犬が針金でしばられていたらかわいそ.udという気持ちを持つ子ども、春になつて青葉が出れば、すばらしく美しいものだという感じを失なわないような子どもでなくてはいけません。日常性を欠如した生活の上に非日常性的教育が頭でつかちにのかつかつているならば、教育のほんとうの力というものを發揮することはできないように思います。

二、言語における母乳教育から離乳教育

いよいよ、言葉の問題の“何を”に入るわけですが、母親が母乳を与えるときの母乳にあるのが前期の子どもにおける教育の言葉ではないかと思います。母乳は、小さな子どもが成長していくためのものすべてを含んでおりますが、母なる言葉、先ほどのマザー・タングはすべての可能性を秘めた原動力であると思います。

ただ母親だけでやります教育は、ある時期になりますと、子どもの精神に少しブレークをかけるようなところがでてまいります。それでおそらく、七、八歳から十歳くらいになるとおか

あさんの言うことを聞かなくなつて、反抗期がでてくるのだと思います。これは母親が、母なる言葉の力にもたれかかり過ぎまして、離乳を適当な時期にしないためにおこるのだと思います。

そこで、皆さんにお願いしなければならないのは、母親がうつかりして母なる言葉からの離乳をしないでいたら離乳を行なつてやることです。それでは、その場合にどういう言葉を教えれば母なる言葉からの離乳が行なわれるかということになると思います。

私は、語学の教師をいたしておりまして中学校の生徒以上の年齢の子どもに外国語を教えるというのは大変むずかしいことを痛感します。あまりむずかしいのですから、途方にくれた語学の教師は外国人の語学の専門家に意見を聞くのです。どうしたら最も少ない時間で、効果が上がるだろうかと意見を求めたりします。それに對して、赤ん坊が言葉を覚えるように教えたらよかろうなどと言うのです。それが、自然学習法と言いまして、現に最も有力な方法として行なわれているのですが、実はとんでもないことがあります。中学生を赤ん坊のように教えたらそれこそ中学生は反発をしてしまいます。十二、三歳に達した子どもが赤ん坊のようになることは不可能です。十二、三歳の

子どもには十二、三歳の子らしい勉強をするのが自然学習法のはずであります。それはとにかく知識として、母国語でないものを教える教育、言語教育の理想の方法は、現在ありません。

それで子どものうちにやれば一番いいという人ができます。外国語をあまり小さな子どもにやらせますととんでもないことになります。皆さん方で外国語、英語の早教育に関しまして積極的な意見を持つてらっしゃる向きは、十分お考えいただきたいと思うのです。

母なる言葉から離乳をいたしますときに、どういう言葉で離乳をすれば一番いいかと申しますと、おとぎ話みたいなものがよいのです。おとぎ話は日常性を持つていらない。超現実世界をえがいたものです。それから童話を聞かせるのもよろしい。これが母親が人手を借りないで言語的離乳をさせてきた一つの方法であります。どこの国の家庭でも、おとぎ話をきかせ、子守歌、童話をきかせるのが欠くべからざることになっていますが、これによつて子どもの言語が母親の言葉から離れるきっかけをつかむことができるからです。ところが現在ではおとぎ話のできる母親がきわめて少ないのであります。それで世界の童話全集というのをもつてきて、『お勉強』をする。しかし、離乳期においては、そういう文字になつたおとぎ話では十分な効果を上

げないのであります。

やはりおかあさんが何回も何回もくり返して何回も聞いたもので、そらで言えるようなものでなければいけないのです。そういう話を今の若いおかあさん方がどれくらいもつてらっしゃるでしょうか。五十年前のおかあさんに比べて非常に少なくなつてきていると思います。言語的離乳にそれだけ不便になつてゐるということであります。幼稚園の先生はそういつたおかさんのいろんな欠陥を補つてあげる必要があるかと思いますから、おとぎ話、童話といふものに対しても、これまで以上に関心を持つていただきたいものであります。

三、子どもにきかせる話

その場合に、童話、おとぎ話はどういうものがよいかということになります。具体的に述べますと複雑でありますけれども一つ言えますことは、片よつてはいけないということです。ある先生が、ひとりの童話作家に興味を持ち、その作品のファンになりますと、それだけを子どもに教えてしまいやすい。人情としてやむ得ないことですけれども、これは子どもにとってはゆがんだ離乳言語を受け取ることになります。昔のおとぎ話は作者がはつきりしていない。誰がいつ、どういうふうにして作つたか、わかつていてないのであります。そういういわば古典的なおと

ぎ話がやはり一番よろしい。現代において、児童作家のさまざまのすぐれた作品が出ておりますが、ひとつこまるのは、作者が原稿用紙に向かって書いていることです。そういう言葉を印刷にして、それを読んで子どもに聞かせても、ほんとうの意味での言語の教育にはならないのだと思います。

児童作家は創作に当たっては、口で何回も言つてみるのです。芭蕉は自分の俳句を完成させるまでに、舌頭で千転させよ、何回も何回も何回もくり返しつくり返し言つてみて、これ以上どうにもしようのないという形まで推敲することを俳句の作法としてのべておりますけれども、それに習う要があります。母乳語を離れたばかりのような子どもに与えます言語、離乳食の言語としては、完全にわれわれの口と耳の中でこなれた言葉を与え必要があります。現在の児童文学にはあまりにも小さな芸術的意図がみえています。そういう作品はもう少し年齢が高くなつたところにおいては効果があると思いますけれども、幼稚園の段階においては、すこし人工的ではないかと思うのであります。

もう一つつけ加えますと、幼児の中期における言葉の教育で

何を教えたらいかということは、はつきりしておりませんけれども、なるべく長い歴史を経てきた自分の国のおとぎ話を中

心にしていただきたいと思います。そして、それによつてできものが、俗に『三つ子の魂』と言われるものであります。逆に三つ子の魂をしっかりと作り上げるものは何であるかというのを考えますと、日本語にどっしり根をおろして五十年、百年ではビクともしない言語でなければ、なくてはならないことがはつきりしてくるでしょう。そうでないと、せっかくの学習能力の非常に高い時代に、非常にゆがんだ三つ子の魂を作つてしまふ結果のよう思います。

この点に関しては、現在の幼稚園をとりまいてる状況は、必ずしも理想に近いとは言えないと思います。末梢的なこと心目をうばわれないで、魂に単刀直入にはいつていくような言葉は何かを求めますと、きのう作られたような作品ではダメなんです。去年できたベストセラーではダメです。十年前のものでももなお新しすぎる。やはり何十年、百何十年、何百年代と伝わってきた言葉の中でつちかわれている物語のうち、これだと思われるものを二つか三つを選んでそれだけを教えるにしても、三つ子の魂は現在よりはよほどしつかりしたものになるよう思われます。

何をという問題はこれくらいにとどめておきまして、それは「なぜ」言語がそんなに大事なのかという点にはあります。なぜ人間は言語を教えるのか。私どもは、赤ん坊が言葉を覚えることを当然のことのように思つております。それがすばらしいものであるということを考えたこともないくらいであります。けれども、人間が生まれてから数年の間に言葉が自分でしゃべれるようになるというのは現在の最先端の学問においても見当もつかないくらいむずかしい問題です。

一、生成文法

私どもは一生自分の頭の中に日本語文法を持つておりますけれども、その日本文法がどういうものであるか自覚したことがないのです。

「ある」という動詞の活用ができますか、と聞かれたときに、英語のbe動詞なら知つてゐるけれど「ある」の活用はどうもということになる。ところが「ある」という言葉をちゃんと活用させて日常生活でまちがつたことを言わないでいるのです。文法は私たちの頭の中に無意識、無自覺に、しかも完全な形であつて実用になつています。英語の文法では動詞はちゃんと知つてますけれども、英語で会話はできないかもしません。どういう文法をもつてゐるのかわからぬのに今まで一度も聞いたことのないような文章をつくることもできます。

そういう能力をアメリカの言語学者チャーチル・スキーという人は

生成文法と呼んでいます。この生成文法はむずかしい言葉でありますけれども、要するに文法における三つ子の魂なのです。三つ子の魂なんてことはアメリカの人は言えませんからジェネラティヴ・グラマリー(Generative Grammar)と言つてるのであります。そういうことがどうしておこるのでしょうか。これがわかれば、人間が類人猿と違う根本的なところがはつきりするんですけれども、それはよくわかつていないのであります。

二、言語哲学

しかし二十世紀になりまして、世界的傾向として最も興味のある分野は言語であるということに期せずして多くの人たちの意見が一致してきました。現在の哲学は、言語哲学といわれるものであります。どうして言語が今のように人間にとつてのみ存在しうるのか、——一体どこまでが言語というもので人間は説明がつくのか、そもそも言語とは何かというようなさまざまな言語についての疑問がでてまいりました。それで社会学、心理学も哲学も言語学も大きく変わろうとしています。実際の教育とは無関係であるというのはせまい考え方です。

この世界的な言語に対する関心を目立たせた一方の中心であると見なされるウイットゲンスタインという哲学者が新しい言語哲学をこしらえたきっかけは、故国へ帰つて小学校の先生をいたしましたときに、児童の言葉を観察している間に、ここで分析哲学の着想を得たというのです。今日のヨーロッパの言語哲学は、ウイットゲンスタインがとらえた言語、この不思議なるものという考え方をめぐつて動いていると言つても過言ではないでしよう。

ウイットゲンスタインは小学校の児童しか観察できなかつた。これからは言語の問題はもつと前の段階、幼稚園における言語、児童の言語というものを考えることによって、さらには、その前の前期における母親の教正在する母乳としての言語という問題をとりあげることによっておそらく前人未踏の新しい分野を切り開くことが可能です。こんなに忙しいのに哲学なんてとんでもないとおっしゃる方は、哲学の本質を誤解してらっしゃるのです。なぜという気持ちを持つて子どもに接せられるならば、そのときその人はりっぱな哲学者であります。幼稚園の先生方が大変忙しいことは、局外者にも十分想像できます。しかし、園児が帰つたあとほんのわずかな時間でも、言語についてなぜだろう、という気持ちを持たれれば、

そのときにおそらく現在の最先端の学問が解決していないようないます。

研究室で机に向かって厚い本を読むことが研究であり、学問であるというような考え方は過去の学問の姿であります。休息の、ほんのわずかの時間にでも、頭の中をかすめるような疑問を疑問として素直に追求していれば、新しい学問がそういう人の手によってできるのであります。ですから、私は教育の実践活動に従事している方がもう少し真の意味において哲学的であることが非常に望ましいことではないかと思います。なぜという気持ちを大事にしていかなければ、幼児教育というほどんど地図のない国で皆様方の歩かれたあとが道になるでしょう。

皆さん前に道はないかも知れない。しかし、自分の歩かれたあとが道になる。そういう道を皆さん方はみつけられるのです。考えてみれば非常に幸福な職業であるわけです。このなぜとう気持ちを大いに持つていただきたいと思うのであります。

言語教育における“いかにして”

一、ウエットな愛情、ドライな愛情

最後に第六番目、いかにして。

これが実践論であります。皆さんのように幼稚園で日々実践

活動をしていらっしゃる方々に対して、私のようなまるで素人が飛びだしてまいって余計なことを言うのは、釈迦に説法といふことあります。申しあげなくともいいかと思いますが、局外者として一つ言わせていただきます。。母親の愛情が大事だということは再三申し上げてきましたけれど、幼稚園の先生方

ならば、当然おかあさんのかわりをつとめられるということを非常に期待する反面、おかあさんの持つてゐるような愛情を幼稚園の先生に期待するのは、やはりまちがつてゐると思います。母親の愛情をぬれた愛情ウエットな愛情だとしますと、幼稚園の先生方の愛情はもう少し乾いた愛情というものであつてほしい。そのウエットな愛情とドライな愛情とが、うまく裏表をして協調したときに子どもの言語的離乳というのは、ある程度の刺激、衝撃を伴いながらも、その子どもにとつて発展的創造性をもつて行なわれることになるだろうと思います。

ところがこのごろ幼稚園通いのおかあさんと子どもさんを見ていますと、おかあさんがひどく教育的になりまして、あのときどうしてバツつけなかつたの、ダメネ、何子さんはああしたのにあなたどうしてしなかつたの、などとやつていて。こうドライな愛情に変わつてきています。おかあさん方が幼稚園の教育というものに協力してゐるんだと思つてゐるのだったら、誤

解もはなはだしいと思います。

一種の分業ということが必要になります。分業が行なわれるにはやはりおかあさん方の教育が何らかの形で行なわれなきやいけないのでです。子どもたちの母乳の言葉の教育は母親がしなくてはならないのです。学校で女性に母親としての言葉の教育はゼロであります。そういうことを、もしやろうとすれば社会から大変な反撃を受けるであります。しかし、社会でもおかあさんの言葉を高めるような教育が行なわれてゐるかといふとやはりゼロであります。婦人雑誌なんかをみると衛生、栄養に関する育て方はとりあげられてはいるけれども、人間を正しく教育する、一番の根幹に対する指導はきわめて少ないようになります。ですから、幼稚園では、子どもだけでは教育は完成しないのです。やはり母親をまきこんでの教育になります。しかし先ほどのようによく妙な教育ママにするのではなくて、母親のしっかりした地位、立場を失なわない上での教育というものがなければ、どんなに先生方が幼稚園で努力されても十分な効果があがらないと思います。

その場合、乾いた愛情というのは何かきびしい愛情で、ウエットな愛情はやさしい愛情という誤解をお持ちになる方があるかも知れませんけれども、そうではないのであります。乾いた

愛情というのがほんとうに効果をあげるのは、子どもを適切なときに「ほめる」ことに尽きるようあります。おかあさん方のウエットな愛情は、とかく小言辛兵衛みたいになつて、絶えず子どもに小言を言つてゐる。言葉数が多くなりますと、言葉のインフレーションをおこしまして、「ダメですよ」と一こと言つた方が百回言つたよりもよく効くのです。しかし、おかあさんは何回も言わなければ気がすまないらしくて朝から晩まで同じことをくり返している。そうすると子どもはそれに対してもう一種の防ぎよ体制をつくります。馬耳東風的な受けとり方をします。おかあさんはこれでもまだダメかと思つてさらにうるさく言います。子どもはますます馬耳東風になる。これでとんでもないことになってしまいます。

子どもに心をふるい立たせるのは、ことに乾いた愛情で成果をあげるには、子どもをほめることです。一人の子どもを母親が教えるのとは違つてたくさんの子どもを一人の先生が教えるというような状況においては、理窟つを言う前に、どの時点での子をどういうふうにほめるかということについての方法論を持つてゐるか、いないかが分れ目だと思います。持つていれば、乾いた愛情で、おかあさんがし得なかつたことまで十分に導いていくことができる確信するものであります。

このほめるということは、案外むずかしいことであります。外国の言葉をみましても「あらさがし」に相当する言葉はたくさんあります。が、「長所さがし」という言葉はないのです。これまでの人間の考え方方が人間の欠点を改めるという方に向かうあまり、人間をのばすということをなおざりにしていたことのあらわれではないかと思うのです。これから教育はほめることが考えなくてはなりません。ただやたらにほめても効果はないのですから、ほめるタイミングを失なわず、しかるべき時に誰がみても肯定するようなほめ方をしませんと、集団教育の中で、一種のえこひいきのようなものがはいりこむ余地もあります。

ですから、きびしい乾いた愛情がないと、ほめるということは効果を発揮いたしません。しかし、いろんな条件をふまえた上ですと教育はほめるということに尽きるのです。人間の学習能力がたいへん高い幼児期において、今まであまりほめるといふことをしないで教育をすすめてきたというのは大きな失敗だつたと思うのです。それが教育は何となくいやなものだという感じにつながる一つの理由ではないかと思います。皆さんにはひとつぜひうまくほめるということを見いだしていただきたい。それが地図のない処女地のような幼児の教育における唯一の確実な磁石であります。それに導かれて進まれるならば、おおよ

その方向をまちがうことはなかろうと思うのです。

おわりに

これで、大体“いつ”“誰が”“どこで”“何を”“どういうふうに”というようなことを申してきましたけれども、最後にもうひとことだけ申し上げます。皆さん自体が、子どもだけにかまけてご自身の進歩を忘れられるようなことがあれば、これは教育としてやはり由々しいものになろうと思います。先生が子どもと

同じように進歩するというのは残念ながら不可能ですが、とにかく一步でも半歩でも毎日前に進んでいるということが、子どもの育つている魂をより大きく育てるのだという仕事の自信につながるだらうと思います。

過去の教育は完成した人間としての教師による教育を考えていたのではないかと思います。私どもは、永久に未完成、不完全な人間であります。しかしこの不完全なものにより少しでも完全なものしていくというエネルギーを頼りにして、そういうものがいれば子どもたちの成長も助けることができるのです。教育の前提となるものは、教師自身がいかに自らを育てるかということに帰着するように思います。

ほんとに教育の効果をあげるというのはどういうことかと言いますと、“年をとらない”“美しくなる”にあると思います。

この二つに成功すれば、女性の方はことに具体的な形で自分は進歩しているんだという自信がわいてくるだらうと思います。

誰しも美しくなりたいとお化粧をしますけれども、それははかない道化の技であります。そういうお化粧によつてではなく、心のもちかたでいよいよ若やいで、いよいよ美しくなれるには、先生方が日々これ好日、日々これ若く、日々これうるわしくある必要があります。

そんなことはできないだらうとおっしゃる方は、教育というものにまだ十分目を開かれてないからであります。

二十代の人間の顔というのは親の責任だと言つていい。三十歳ぐらいでも親の影響を脱することはできません。それで三十三十になつたらそろそろ逆に年を取るのは、やむを得ないでしよう。しかし、三十になつたらそろそろ逆に年を取ることが可能だと考えてよろしいのです。ヨーロッパに四十になつたら自分の顔に責任をもつてという言葉があります。四十の顔はもはや親の責任ではないといふことです。四十年間のその人の人間としての総決算がわれわれの顔に出る。いつもわれわれはその決算書をぶら下げて歩いているのです。（笑）

若く美しくあるためには、どんなことでも、どんなにしからんことでも、何も考へないよりは、考へた方がよいということ

は言えます。家庭には、いつて十年間たつた人とバーのホステスとして働いていた人と比べてみますと、少なくとも女性として、バーのホステスの方が若いでしょ。考へていることや生活様式価値とか、そういうことは無関係に、新しい刺激というものに絶えず身をさらしてゐることが人間を老化させないで美しくするのでしょ。場合によつては逆に若くすることもあります。

それでは具体的にどうしたらしいかということになるわけで、ひとつ手をお教えします。三十歳ぐらいになってから、一つ外国语をお始めになることです。皆さんはやっぱり外国语の教師だから我田引水をするとお考へになるかもしません。しかし、皆さん、中学校や高等学校でお嫌いになられたかもしれない英語などをやついただきたいと思つてゐるではなくて、エスキモー語でもホッテントットの言葉でも純粹に言葉をして勉強してごらんになると、しわがのびるでしょと申し上げたいのです。そして美しい顔に除々に近づいていくことができるでしょ。そういうことをなし得た先生から教わる幼稚園の園児は、最大の幸福を与えることになると思います。

三つ子の魂は、残念ながら母親の手によつてつくる他はないと思ひますけれども、かりに五歳児の魂というものがあつて将

来大きな影響をもつものだということがわかるようになれば、いま申しましたような、永遠に若く、うるわしい、しかし、経験はきわめて豊かな幼稚園の先生によつて築かれるものであることは、ほとんど確実だと思います。そういう意味で、教育の最も基本的な、人間性を形成するような仕事が、皆さん方の前に横たわっているのであります。それを考へて興奮しないといふのは人間としておかしいくらいであります。私は、自分のことではないのにその可能性を考えると興奮を禁じ得ないものであります。そのすばらしい可能性を日常目の前にしていらっしゃる先生方が誇りを失なわぬで幼児の教育に当られるならば、人類のために大きな貢献をされることになるのを疑いません。素人がいろいろ申しましたが、長時間熱心にお聞き下さったことを感謝して終りにしたいと思います。ありがとうございます。

(お茶の水女子大学)

現代の子どもの意志・情性の病態

和田重正



大変遅くなりまして申しわけございませんでした。高速道路の上で一時間以上も動けなくなつて、あんまりイライラしたものですから、何を話そうと思っていたかもう忘れてしまいまして、これから、ぽつぽつ思い出しながら話させていただきたいと思います。

実は今ここへ入つて来て、その演題を見まして、ちょっと驚いているところなんです。この題についてはあまりよく知りませんでした。二、三日前に周郷先生からお電話がありましたけれども、要するにやる気と感情といったようなことだということだつたのですから、私も、じゃあまあその気でやりましようと思つてまいりました。

もう一つ最初におことわりしとかなきやならないのは、私は学問ということを何もやつたことがない者だということです。

皆さんはおそらく、幼児心理とか、教育学とかいろいろむずかしい学問をなさつていらっしゃるだらうと思いますけれども、私はそういうことにまったく無縁でして、ただ自分の気のおもむくままに、主に中学生を相手にして四十年間、寺子屋という、はなはだ現代離れしたことをやつてまいりました。その寺子屋というのは、学問をするところでもないし、また、特別なこれといった修行をするところでもなくて、ただ私は、自分自身、人間ていうのはどういうふうに生きるのが本当なんだろうか、あるいは、自分というものはいったいどんなものなんだろうか、ということ、そればかり考えて、とうとう一生を過ごしてしまった。そして時に、若い人たちが寄つてくると、自分がこう思つたんだ、こういうふうに生活してみたらこんなふうになつたんだ、ということ、そういうことをお互に話しあい

ながら、いつの間にか四十年過ぎてしまった。まあ、こういう経験の人間なのです。

ところで先にも申しましたようにこの題をよく知りませんでしたので「やる気と感情」くらいのつもりで話させていただこうと思います。

欲望とは

近ごろ高校生なんかで、三無主義といって、無責任と無気力となんとかとか、無が三つつくという、そういうことがはやってるんだということをよく聞きます。その無気力というのは、やる気がないということですね。やる気がないというのは結局どういうことなんだろう。いや、それより前に、たとえば、やる気があつてもあの赤軍派みたいなのは困ります。テルアビブとかいうところで、バリバリッとこう機関銃なんかぶつ放して人をいっぱい殺しまる、というようなこと、あれもやる気があつてやつたんだろうと思うんです。ひとりでになんとなくやつちまつたというんじゃないだろうと思うんです。だからやる

氣があつてやるといったって、そういうふうにやられたんじゃ困る。何か建設的な、あるいは生産的な、そういうようなこと、いわばいいことをやる気になってもらわなくては困るわけです。何かをやろうという意欲が出るのは、まずそれにふさわしい

感情の興奮がなければならないと思うんです。ところが、その感情っていうのは、私は自分の経験から考えてみると、これは欲望と何か非常に深い関係がある、欲望に何か付随して出てくるもののような気がするんです。ですから、これは一面、欲望の問題じゃないのかなというようなことを思うんです。

欲望の問題として考えてみると、人間の欲望にはいろんな欲望があります。本能的な欲望、たとえば食欲とか、性欲とかといふ基本的な欲望があります。そういう種類の欲望から出発して、それをもつと確実に確保していくというか、つまりいつの場合にでも自由にそれをみたすことができるような状態を作りたくなってくる。物をためておきたい財欲とか、もつと発展していくというと、支配欲とかいろいろな欲望がでてくると思ふんです。そしてこの性欲とか食欲を基点として発達していく欲望は、すべてその性質上物質的、官能的であるのは当然です。またそのことはこれらの欲望が本来エゴイスティックな傾向を強くもっているという意味にもなります。

集団の原点

ところが人間には、そういう欲望と少し系統の違う、愛他的な欲望といったような欲求があります。これは言葉としてまづいかもしませんけれども、私の理解からするとやはり欲望の

一種だと思いますが、そういうものがどこから出てくるのか考
えてみたいのです。

ちょっとと話が横へ行きますけれども、生物の中には集団生活
をするものがあります。生物がずっと昔から生存競争で生き残
つてくるのには、何かしら生存競争に勝つ力を持っていなきや
ならない。で、どんな力を持って生き残つてきているかといふ
ことを見ると、個体として非常に闘争力とといふか、行動力が
あるもの、ライオンだとかトラだとか、タカやワシみたいな猛
きん類とか猛獸とかいうものが生き残つてきました。それから
また、雑草みたいに、あるいはミミズみたいに、ふんずけられ
ても、切られても、それでも生きていくという、なんていうか、
非常に生命力の旺盛なものがいる。ネズミなんかも、いろんな
動物のえさになるのがまるで使命のようにできている。それで、
どんどん食われても食われても、まださかえていくという、あ
れはその繁殖力でもって生きのびてきたんだということになる
と思うんです。もう一つは、アリだとかハチだとか馬というよ
うな、集団の力でもつて生きしていく動物がいる。

で、人間はいったい、そのうちのどれかというと、主として
集団の力で生き残つてきた部類に属すると思います。
ところで、こういう集団の力で生きていく動物は、集団で生
きていくのに都合のいいような本能を本来持つてゐるわけです。

それはどういうのかといふと、結局自分勝手、めいめい勝手、
ひとのことはなんでもかまわないというのではなくて、共感と
いうか、ひとの気持ちと自分の気持ちが相通ずるような、そう
してみんなが外敵に対してもうかまわないと、そういう能力な
んですね。その能力が発展すると、お互いの立
場や気持ちがわかつて、おもしやりとか、愛情とかいうような
ものになつてくる。そしてそれによつて、いい集団ができる。

人間の社会というものはそんなふうにしてだんだん発展してき
たんだろうと思うんです。

ところが、人間は不思議なことに、他の動物と違つて、知能
というものが発達する。どつちが先だかよくわからないけれども、
欲望と相もなつて知能は発達してきたんだろうと思うんです
が。そういう知能が発達してくるに従つて、かえつてだんだん
お互の同志、相通じあうという本能が弱められてきてしまつて
いるのではないかと思います。お互いがお互いの気持ちを察し
あう気持ちとか、あるいは深い愛情というようなものが乏しく
なつてきたようだ。どうしてそうなつたのでしょうか。
そのような温かい豊かな心情のでてくるその元のところを、情
性という言葉でいうらしいんですが、社会生活が複雑になつて
きた関係からか、その情性の発達が非常に妨げられているの
だと思います。今日、われわれが中学生や高校生に接觸していく

ですね、すごくつき合いにくくなつてきているのを感じるのであります。人の真心が何のちゅうちよもなくけなされるばかりでなく、こつちがいおうとすることを心をとめて聞こうという気持ちが、大変少なくなつてきてているような気もするんです。それと同時に、物をじっくり味わうということもなくなつています。また暖かみというか、お互同志が損得をこえて助け合い相むつみあって楽しくやっていくというふうなことが少なくなつて、生活が浅はかになつてきている、とまあこんなことを痛感するんです。

このごろの子どものやる気

そこで話をやる気に戻しますが、このごろの子どもたちの中にもやる気のあるものもかなりあります。しかし、どんなやる気があるのかというと、大体非常にエゴイスチックな、早くいえば、人をやつづけて自分が勝つてやろうというようなやる気です。そんなことにファイトを燃やす者はかなりあります。そのほかの者は何もする気がありません。われわれの所に来てもまったく何もする気がないっていうのがいっぱいいるわけです。そもそもやる気がないといつても、やっぱり肉体的に精力があふれてくるから何もしないでいられない。そこで強い刺激でもつてその場その場をこまかしていくことになつてきます。

そういう青年がものすごく多くなっていますね。何もしないでぼやーっとしてテレビばかり見ているという子もたくさんいますけれど。それが、何か妙な方にやる気を起こしてしまって。オートバイをふとばして、夜中にそこら辺を走り回る。この間テレビで、そういうグループを金沢から連れて来て、いろんなことを聞いています。ああいうことをなぜやるのかっていふたら、おもしろいからだつていうだけなんです。それ以外は何も興味がないらしい。ああいうのはもう本当にやる気がなくて、それでやつとやる気を見いだしたっていうのが、ああいう猛烈な、自分も命をかける、それから人をけがさせる、夜中に氣違いみたいな騒音をたてて安眠妨害をする、そんなことなんですね。建設的な方向に何の興味もなくなつてしまっている。そういうのが本当にたくさんいるし、一般にもだいたい、みんながいく分かずつそういう傾向になつてきている。

そういうやる気がなくなつて、強い刺激だけを求めていくと、いわゆる非行少年になるのでしょう。この間おもしろいことを聞きましたね。非行少年なんかを預かる、何とか学院という、昔でいうと感化院のかな。そういう所の院長さんに、「このごろは満員で満員でしようがないでしようね」といつたら、『いやとんでもない、このごろは入つてくる人が定員の半分ぐらいです』少年院でも減つてゐるんだそうです。一番さかんだ

つた時から比べると半分にもなっていない。ということなんです。どうしてだろうって驚いたら、それにはいろいろな理由があるけれども、その一つの大きな理由として、みんなが不良化の方向へだいぶ進歩したために、よっぽどひどいのでなければつかまえてこないことになったんだというんですね。たしかに

そういわれればそうですね。われわれが中学生なんかを見ても、昔だったら不良だと思うのが、今はごく普通ですかね。だから、そういうするつていうところの頭がおかしくなっているのかなど自ら疑いますけどね。たしかに子どもたちが、全体として無気力でくだらない刺激を求めて興奮したがるという傾向になつているんだと思います。こんなやつばかりいつぱいでできたら、もうわれわれ明治人は、いたたまれませんが、おそらく若い人たち同志だつて、そんなのはあまりいいと思わないんじやないかと思います。ところが、不思議なことに、その時のテレビで、そういうことをやらない若い人がほかに大勢来ていて、その人たちに司会者が「自分がおもしろいからやるんだつていようよなの、それでいいと思うでしようか」と聞いたら、そんな馬鹿なことなんてといったのは一人ぐらいしかいなかつたんですね。あとはだいたいみんな、そういう程度に夜中のかみなり族に共感しているんです。これはもう本当に恐るべきことだと思いました。

情性・意志の欠乏—その原因

なぜそういう傾向がだんだん強くなってきたんだろうと思うと、これは当たつているかどうかわかりませんけれど、私はどうも、小さい時から何でも与えすぎているんじゃないのかなと思つてます。私は自分の子どもについてはどうだったか忘れてしまいましたが、孫がいっぱいおりまして、それが年がら年中出たり入ったりしますから、孫はよく観察しているわけです。そうすると、何でもよく親が気が付いて、食べる物でも、遊ぶ物でも、まだほしといわないので食べさせらるんです。にんじんを食わないと、食べないと大きくなれませんよ」と、なんてよけいなこといつて、変な物でこすつてみたり、いろんなことして、それを無理に食べさせようとする。おもちゃなんかでも、まだ目が見えないのに、こんな大きな風錦みたいな物、ぐるぐる回るのね、それも一つじゃない、二つも三つも方々からもらつたのをぶらさげます。何でも自分がほしいと思わない先にみんな与えられてしまうんですね。子どもは本当にかわいそうだと思います。食べたくないのに、これ食べなけりや栄養失調になるだの、大きくなりませんよだのつていわれて、むりやりに食わせられる。ああいうことつていうのは大変な間違い

だと私は思うんです。子どもは、ほしくなって、それを自分でとつていく、ほしいものを選択して自分がとつていくという、そういう意欲が、そんな時から失うようにされてたんじゃ、かなわないなあと思ひます。

もつとひどいのは学校です。一幼稚園は私は本当に知りませんけどー 小学校に入るつていうと大変なものですね。何も、知りたいとも、覚えたいとも思わないことを、むやみやたらに、しかも驚くほどの量をつぎこまなけりやならない。消化できませんよ。上の学校ではなおさらです。現在中学だの高校なんかの、あの教科書ですが、一みんなさんはこの間やつたばかりの方が多いらしいけども、それをふり返つて見てごらんなさい。とにかく、大変な量ですよ。だから、興味をもつて消化しようなんて、そんな意欲を起こしている暇がないですね。いやだつていつても、無理やりにこうやって、ちようどベルトコンベヤーでいうんですか、あれにご馳走がいっぱい並べてあるんです。それがずーっと来る、それをパッパカ、パッパカ、パッパカこな食べなきやならない、どんどん、どんどん。それで時々、からだをドンドンゆすつてはまた、食べなきやならない。そんなふうに今の仕組はなつてます。

少し余計な話になりますけれど、ここんとこちよつといわないでいられないからいいますけどね。人間、そんなに知識をた

くさんもつて、いったい何になるんだろう。食べ物ならたくさんあつたらつくだ煮にしてあとで何かするということもあるけれども、知識なんていうと、本当はいったい何になるんだろうなあ……。あんまり知識が進んで、根性が悪いと原爆や水爆を作るように利用してしまうということになります。

とにかく私は、学校で詰めこんでいるのは消化不良を起すがらくた知識だと思います。家に帰れば使い切れないほどの物を与えるし、知識だってね、うんざりするほど、本当にうへどはくほどいっぱい詰めこまなきやならなくなつてる。それでいつたい、意欲つていうか、やる気を起こす欲望が発展していくだらうか。私は、人間らしい積極的な働きをしようという意欲が失われてくるのは、要するに与えすぎだとか、教えすぎだとかいうようなことだと思うんです。子どもたちの食べ物や、遊ぶ道具については、私はあんまりよくわからないんですけど、せめて学校で教えることね、あれは半分にしてもらいたいなあ。そしていろいろチェックしてみると、よっぽどおませしても、四割ぐらいへらしても決して知能の程度というか、発達ということには、さしつかえないどころか、その方がはるかに有利であるということは、もう間違いないと思うんです。今度の文部大臣は、教科内容の量を減らすといつておられますね。あれは大賛成ですが、どんな考え方でどんなふうに減らすのか、

これは本当に刮目していい所だと思います。とにかく今のような、何でも与えられすぎるというのは、すみやかに改められなければなりません。

疑問をもたない子ども

だいたい、知識を与えられすぎた子どもたちは、疑問を起さないです。今、私のところに娘がお産で帰つて来ています。その娘に一歳と十ヶ月くらいの子どもがいますが、その子はけさも出てくる時に、やかんをふって、「なに? なに? なに?」つていうんです。「やかん」といつてやると、「あがん」なんていつて、またすぐにこっちの方を見て「なに? なに?」つています。そういうふうにいろんな疑問を起こすんです。それを見していて、いいなあ、大いに疑問をもつようになつてくれればいいなあと期待しています。

ところが、もう中学生くらいになると、まったく驚くようなことがあります。私は、英語を教えるんです。中学一年生が入つてくると、何も教えないで「はい、いいかい、私が言う通りに真似するんだよ」つていてね。たとえば「アイ アム ア ボーイ」とこう言つて、「アイ アム ア ボーイ」を十回いわされれば、大抵の子はうまく言えるようになつてしまふ。そしたら、「これいつたい何だろう」「先生、これ何ていうことですか」とか、なぜい、みんな言つてごらん」「アイ アム ア ボーイ」をしたるまた「アイ アム ア ボーイ」つてみんな言つてゐる。何

回でも言つてゐます。これが不思議ですね。われわれが中学の時、だったらそんなことはありませんよ。おや? どうして何度も同じこと言わせるのかなつていう疑問を起しましたね。ところが今の子は、素直なんですかね、そういう点は。二十人いても、三十人いても、その中に疑問を起す神経もついている子がいるんです。相手からこうされたら「は」「は」、それに反応するだけ。ポンと来たら、ポンとはね返す。そういう反応をしているだけなんですね。何も自分の方から「アレ? これは何かな?」そんなこと思わないらしいんです。

で、私は小田原ですから、気候のいい小田原の子だけなのかなあ、と思っていたら、そうじゃないんですね。夏休みになりますと、丹沢の山の中の一心寮で小学生の合宿をやります。そこへは大阪からも来る、名古屋からも来る、東北の方からも来る。その方々から集まつた子たちがやっぱり同じ反応です。だからこれは全国的な現象だなと思っているわけです。

さつきの一年生の英語の話ですが、私はどう思つてゐるかといふと、アイ アム ア ボーイを十回いわされれば、大抵の子はうまく言えるようになつてしまふ。そしたら、「これいつたい何だろう」「先生、これ何ていうことですか」とか、なぜこんなこと言つたとか、何とか言つてくれそうなんだと思つて、こつちは一生懸命書きを見せてゐるのです。それだのに

ちつともエイツとこう斬りこんで来ないんですね。あんまりひつかかってこなくてしょうがないから、これは何ていうことだと思うかつてきいたら、まだボーッとしている。これは「私は少年である」ということだ、そしたら、ああそうか、と思つているだけなんです。どれが「私は」で、どれが「少年」で、どれが「である」なのか、そんなことも思わないらしいんです。

それでしあうがないから、いろんなことをだんだんに言つて、結局みんな教えてしまいます。そうすると今度は、「あなたは」つていうのは何て言うんだろうって疑問を起こしてくれそうなものなのに、絶対起こしませんね。そういうふうに意欲がない。このように意欲がなくなってしまったということは大変なことです。国家、人類にとつてというほど大きな視野でなく、一人一人の子どもの将来を考えても本当にかわいそうなことだと思います。ですから、なんとかして疑問を起こす神経を刺激してやりたいとショッちゅう思つてゐるわけです。

落ちつかない子ども

それから、このごろ大変目立つのは、ひどく落ちつきがわるい子です。ふわふわふわふわ、こういうふうなかつこうでやつて来るんです。「先生どこ勉強するの」つていうんです。「何いつているんだ、そこにちゃんとすわってやらなきゃ、ダメじ

やないか」つて言つたら、ふつと中腰ぐらいいなつて、机の上のしかかってくるんです。そういう極端なのは、それほど多くはないけども、しかし最近驚くほどふえています。

親が、「おたくの塾に入れてもらいたい」といつて子どもを連れて来る。すると、親が一生懸命話している間に、子どもはバタバタあはれて、そこら中立つて歩いて、本をひっぱり出してポンとほつといて、また次の本をひっぱり出す。一分もじつとしている。そういう子が案外たくさんいます。私の所は、

別に専門でも商売でもないのに時々遠くの方からそんなのを連れて来たりする。そんなの、手のつけようがないので困ってしまいます。だけど仕方がないからよくよく親を観察してみます。子どもをいくら観察してもよくわからないものですからね。

親を観察しますと、大抵不思議なことに、みんな實に賢い、えらそくなお母さんです、勝気なんでしょうね。現在私のところに來ているうちの一人なんか、おばあちゃん子らしくて、来る時はいつもおばあちゃんが連れて來る。これは小学校の四年生です。そのおばあちゃんなんかはちよつと立派なインテリばかりやんます。「この子の教育はわたしがするんだ」という意氣込みが表に現われています。ところが、孫にあたるその子どもは、ふわふわふわふわとして、おさえようがないのです。頭は悪くないのに尻がいうことをきかないのです。

また、この間遠くの方から来た人があります。夫婦でやつて

す。

真正面を向いた教育

来ました。お父さんはわりに無口だけども、座禅がなんかやつてなかなか自信ありげな人です。お母さんはすぐ賢そうな人で、何でいつてもみんな知っているんです。私など口を出す所がない。教育から心理学に至るまで何でも実によく心得ている。しかし、その賢さや知識ではどうにもならないとみて、子どもは手に負えないほどそわそわしているんです。こうしてみると、自分の知識や見解に自信をもちすぎている人の子が落ちつきがなくなるもののように。

そこでもう一つ、これは自分の経験なんです。うちの一番上の娘には子どもが三人いるんですが、その一番上の子が幼稚園で、みんなが折紙なんか一生懸命やっているのに、その子だけはキヨロキヨロ、キヨロキヨロして、人のを見たり、先生の頭を見たりして、自分のやることを一生懸命やらないんです。まあこれは困ったことだなと思っているうちに、小学校に入りました。娘が学校へ行つて、学校の先生に聞いてみると「どうもお宅のお子さんは、キヨロキヨロ、キヨロキヨロして」と言われて、もういよいよこれは大変なことになつてしまつたというわけで、思案にくれて、日ごろあんまり信用していない私のところへ相談に来ました。そして「うちの子はこうで、学校へ行つてこう言われたんです。どうしたんでしょうね」と言うんで

ところが私は、前から感じていることがあるんです。どういうことかというと、その一番上の娘というのは、まあどつちかというとインテリ型でしつかりしているんです。小学校の先生なんかやつたりして、いろんなことよく知つてましてね。すべて教育的な配慮をもつて子どもに接しているつもりなんです。しかし私は、いつでもあれでは子どもがかわいそうだと思つていたので、言つてやりました。「あなたはね、子どもを本当にちゃんと、まともに見てやつてないじゃないか。子どもを見ていないんだ」。そういうたら、「そんなことないわよ」つてものすごく怒りました。自分は子どもを、こんなに一生懸命見てる、一生懸命考へているんだと言うんです。ところが私が見ていて、どうもそう思えないんです。たとえば、ひどく忙しい時に「ママ、ママ」って言われる。その時に、「今、忙しいから、あとでね」とか、「ああ、そうオ」とかつて、一秒の何分の一秒ですよ、心を真正面に向けてやれば満足するんだろうと思うのに、なかなか返事しないで、しまいに「うるさいわね」とか「まつてなさいよ」とか「ひとが忙しいのがわからないの」などと言います。これじゃ、何かみたされないものが年中気持ちの

中に残るんだろうなあ、かわいそだなあ、とこっちは思つていたんです。

そういうのは、子どもに真正面に向かって、子どもをじかに見ていないのです。何で見ているかつていうと、知識ですね。子どもといふものはこうである、こうしなくちやいけないとか、ああでないとか、子どものこういう時はこういう理由だと、本に書いてあるような理くつを知つていてるわけです。で、子どもを見る時に、子どもそのものを見てないで、自分のそういう知識のあみみた的な物を通して見てるんです。だからむこうからぶつかつて来た時に、あみにぶつかつてしまふんです。からだにじかにボーンとぶつかつて来ないんです。だから、その子は年中物足りないものを感じているのですね。子どもが三人いて一番上なんです。だからますますそういうふうな扱い方をひどく受けるわけです。一番お兄ちゃんなのに、なんていってね。そういう気持ちもあるんだろうと思ひます。

教育的な見地から編まれた知識のあみに、どんとぶつかるよう、それに反応させるような扱い方をしょつ中している。だから私がそいつたら、初めは怒つたけれど、しばらくたつて考へてみると、どうもやつぱりそららしいつて気がついて、で

きるだけ正面に向つて、むこうからドンときら理くつでもつて軽くとめないで、全面的にはつとうけとつてやる、そういう

知識と物

ともかく子どもに對して真正面に向かって物を言つていう

ふうな気持ちになつた時、子どもは見る見るうちに変わつてしまつた。こんなことを言うとすぐに、甘やかすことになるだろうなんて言うんですけど、生意氣なこと言うもんじゃありませんよ。甘やかすことを心配するより、とにかく全面的に受けとつてやるというのがまず第一、本当に真正面に向いてやれば、子どもの本当の姿が見えるから、甘やかすことはできません。それだけの知恵はどんなお母さんにもそなわつてゐるはずです。はぐらかされたり、そらされるのはいやなものですね。おとなどうしだつて、斜にむいているような物の言い方されると、実際に愉快じやないです。どんな馬鹿らしいことでも真正面に向いて「きょうはいいお天氣ですね」つていつたら「そうですね」つて言やいいのに、横向いて「ああ、そうですね」なんてそらされたらなんとなく気分が悪いですよ。「雨が降つて困りますね」つて言つた時「やあ、雨が降らなきや困るところもありますよ」、こういわれても真正面に向いて言われれば、まあ割に気持ちがいいです。一応自分が認められてると思うからでしょうね。なんにもまともに受けとめられなかつたら、その方がもつと気持ちが悪いです。

ことが欠けているような氣がするんです、みんながね。お母さんたちも、おそらく幼稚園の先生や学校の先生なんかもね。どうもそういう人が多いんじやないかと、私は思うんです。本当に知識なんてものは、そりやたくさんあつたつていいですよ。しかし、生の知識じや、こりやだめなんです。生の知識をいっぱいこうつなぎ合わせて、自分の考えじやないですよ。たくさんある知識をよく消化して、それから自分の物として出すなんらいいけども、知識を知識のまんまで応用してみるとなると、子どもをよく見るんじやなくて、理くつの方へ、子どもをあてはめてみようというふうになるから、子どもが本当は何を求めているのかわからなくなってしまう。そういうことがすごく多いような気がするんです。このごろ若いお母さんたちにそういう傾向が強いということが、世の中全体の子どもたちの落ちつきがなくなつてきてる原因じやないのかという気がすらんです。

それからもう一つ、ちょっと似たようなことですけれども、このごろ、中学生ぐらいになると、物を買いたくて買いたくてしょうがない子があるんですね。これはどういうことかといふと、それによつていくらかの生きがいを見いだすわけなんです。だから何か買つてもらうと、すぐに、次は何を買つてもらおうかな、買つてもらう物ないかな、というふうに神経を働かせ

るわけです。物を使いたくて買うのではなく、買うということに関心があるわけです。これは案外多いですよ。

急に勉強ができなくなつた中学生がいるんです。それと同時に物をどんどん買いたがつて、次から次へと物を買うようになる。一体どういうのかと思って、よくよく觀察してみると、原因結果が反対なんです。その家は食えないわけじやないのにお母さんがどこかへ働きに行くんです。それでお金を儲けてくる、儲けてくるからお金がもらえる、そうすると何か買う。親の身になつてみれば、物を与えて満足させてやろうと思うわけでしょ。ところが子どもは中学生くらいになつたつて、三万円の自転車を買ってもらうよりか、家へ帰つた時お母さんがいてくれた方が、どのくらい気持ちの底の方で安定するかわからないわけです。それなのに、親は子どもに何かすぐ高い物を、たくさん与えることによつて、その子を満足させていると思つてゐるのです。お母さんらしい暖かい心とつめたい物とをひきかえにして、それでうまくいってるというふうに思つてゐるんです。そういう子つていうのは、心が不安定で勉強のような積み上げていかなければならないことに対する意欲が、本當になくなつてくるんです。物と心と、どっちの方が本当に満足せられるんだろうというようなことを、もう一度考えてくればいいなあと思う場合が実にたくさんあります。

自分の知識で子どもを育ててやろうというのと、物でもって、うまく育ててやろうと思うのと、これ意外に似ているんです。知識と物質とがね、非常に似ていると思うのはどういう点かと、いうと、両方ともある形が決つてしまつたもので、そういう形が決つてしまつた物からは新しい物を生み出してくることはできないわけです。そういう、ある形が決まつてしまつていると、いう点で、物と知識とは似てゐるような感じがするんです。

感動するということ

われわれが集団生活をし、いい社会をつくつていくために必要な情性。人間同志、お互い同志の思いやりがわいてくる精神的基盤。そしてまた、物事をじつくり味わうという態度を生む安定した心。いつたいどうやつてそれが育てられるんだろうかと、私はいつも考へないでいられません。説明だと、お説教だとかいうものは、知的な理解は助けるかもしれないけれども、感動がありませんね。

私は小さい時、このすぐ近くで育つたんです。ここがたぶん、陸軍の火薬庫のあとじゃないかと思うんですが、この火薬庫のすぐ裏にいたんですね。母とは早く死に別れましたが、この裏に住んでいるころには母がおりました。庭が広かつた。私の母は煙が大好きだったんですね。百姓じゃないんですけど。ここ

前身のお茶の水女子高等師範の卒業生でね。その時分じゃ才媛だつたんでしょう。だけども、烟を作るのが好きで、春になるとほだしなつて、庭の一部を耕して、そこへなすやきゅうりや、いろんな苗を植えたり、インゲン作つたりしたんです。

ある年、私がいくつぐらいか、おそらく三つか四つくらいじやないかと思うんですが、朝起きると一番先に、母は烟を見に行く。私もくつづいて出て行つたらしいんですね。ある朝、台所から裏へ出る、すると小さななす煙があつて、なすが七、八本か十本ぐらいあつたろうと思います。そこへ行つて立つて見ていると、母がね「まあ、なすの花が咲いた」って言つたんですね。澄んだ感激の声だつたのです。私はその時、母のたもとにつかまりながらそれ見てね、「ほんとだ」と思つたんです。皆さんご存知でしょう、紫の黒いピカピカ光るような、なすの茎の所にね、葉っぱがこう出て、そこにうす紫の五角形の花がぱつと咲いて、真中に黄色いきれいな芯、あざやかなもんですね。それを見て母が「まあ、なすの花が咲いた」っていうのを聞いて、私は初めて本当だ、と思つたのです。ああ、本当だなと思った、ということなんです。それが、私が自然というものを見る目を開かされた事情なんです。その時に私は、母が何を感じているかつてことが、自分にはつきりわかる感じがしたんです。もしあの時、母が情操教育としてやろうと思つて、「ほ

ら、見てごらんなさい、なすの花はね、きれいでしょ、形もい
いし、色のとり合わせもね、真中に黄色があつてきれいでしょ」
つて説明したとしたら、私は「うんうん」と言つたきりで何も
感じなかつただろうと思うんです。説明だとか、お説教つてい
うものは、みんなそういう類のことであつて、本当に感動を伝
えることはできないものだと思います。

私は、それがきっかけで、その目で他の物を見ると、みんな
もう、美しいと言葉では言えないんです。美しいとか、きれい
だとかつていう言葉じゃないんですけど、何とも言えない喜び
を感じるようになりました。たとえば、雨だれの下に小さな砂
利みたいなのがいっぱい、きれいに洗われてますね。それをよ
うくみると、黒いものもある、白いものもある、赤いのもある。
小さなものですけど、そういうものを見ても驚くようになつた。
なにしろ、私はこの自然というのに驚きを感じる、そういう
神経をその時に与えられたような気がする。この情の世界つて
いうものは、私は理くつやへちまじやないんだと思うんです。
知の世界つていうものは、合理的な世界ですけれども、情つて
いうものは、超合理的な何かだと思うんです。理くつなんかない。
つてみても感動しない。私はだから、今でもそう思うんです。
あの山の中に、神奈川県の山北っていう、この間豪雨のあつ
たすぐそばですけど、そこいうちの合宿所があります。そこへ

時々塾の子どもたちを連れて行きます。そして、何も説明はし
ませんけど、一週間も一緒に生活してると、やっぱり自然とい
うものに對して、何かしらの感覚をもつてくれる子がボツボツ
でてくるんです。東京なんかから来た子がああいう所にくると、
変わつているからすごいなーと思って、自然を感じるかと思
うと、案外そうでもないです。やっぱり何日間かそこにいる
と、初めてこんなだったのかつて、その美しさとか、安定した
力強さだとかがわかつてくるようです。

きのうなんか行つて見ると、山ユリがいっぱい咲いてます。
そこを歩くと、ワーッと谷の底からユリの匂いがふき上がつて
きます。そこにねむの花が咲いてますしね。ねむの花つて
のは、ふわっとした、とつてもあつたかい感じのする花です。
それから道端には、たくさんピンクのなでしこが咲いています。
その中にまた、こまつなぎだとか、うつぼ草だとか、いろんな
色の花がいっぱい咲いてる。

それを見て子どもは「きれいだな」とつてだいたいそういうん
ですね。「お、咲いているなあ、きれいだな」とこのくら
い。「あ、ユリがある、すごいな」とつていう、そのぐらい。と
ころが、何日間かいると、そんな「お、きれいだな」なんて浅
はかなこと言わなくなつて、本当にしみじみと、ああいいなあ
つていう、そういう気持ちが起こつてくる。これは、私がそ

いうことを教えるとか、何とかいうことじゃないんです。説明するわけじゃなくて、何となくお互い同志が感じ合っていくことですね。そういう世界が、情の世界だと思うんです。

真心

われわれは、人と、本当にこのようにお互い同志が感動し合って生きていきたいなと思います。それには、物に対しても、自然の物でも何にでも、真正面に向かえるようにならなければならぬ、そうでなければ、本当の味なんてものは出てこないと思うんです。この、真正面に向かうつてことはね、口で言うのはやさしいけど、なかなか本当は、われわれ凡人にはできにくいことなんです。その真正面に向かうつてことは、いろんな他の言葉で言いかえることができますね。真心で接するとか、真心をつくすということができると思う。真正面つていうのは、斜に構えたり、そつくり返つたり、前かがみになったり、逃げ腰になって人に接するのではなくて、正しい姿勢で相手に向かう。つまり、真心でもつて向かっていくということです。そして、本当にその真心で、向かった時、お互い同志、感動が移りうるんですが……。

われわれね、人間同志の間で、親子の間でも、先生と生徒の間でも、まともに向かって、まともにものを言う、まともに受

けとつてやる。情の世界を育てていくには、それしかないんだろうという気がするんです。

言葉、真心のこもった言葉です。たとえば、二、三日前に小さな子どもが、畑をつつついでいたら、大きなみみずが土の中からにゅーと出てきたんです。そうすると、その小さな子どもがね「ミミズが出てきた。ワーア、ミミズが出てきた」ついて、もう感激してるわけです。恐れてるんだか、喜んでるんだか、わからぬけど、とにかく感激してるんです。でもそのお母さんがね「そうお、あ、そうお」つていいてね、見てやればいいのに「それはミミズよ」つて言つたら、こんなつまらない話はなくなっちゃいますね。やつぱり「あ、そうお、どうしたの」「とんとたいたいたら、出てきたの」「そお」なんて言つてね。別に何も説明することはない、そうするとそこに、何とも言えない、何かこう、ミミズとお母さんと自分との間に、何かやわらかいものが漂つてきますね。そういうことが、われわれ人間の生活の中で、情を育てていくのに、大事なポイントなんじゃないかなつてことを、しょつ中感ずるんすけれども。やっぱり、言葉でといいますけど、本当に真心のこもった言葉で、というけども、そのためにわれわれ自身が、真心を發揮できる、つまりまともに物を見られる人間にならなきゃならないわけです。ところが本当に物をまともに見るということは、

実は容易なことじやありません。私は宗教のことはあまり知りませんけども、ある座禅なんかやる人、一生懸命なにやつてゐるのか知りませんが、ともかくやつてると、きっと知識だとかいそん余計な物を通さずには、物そのものがはつきり見えてくるんじゃないのかな、と思うんです。それでなかつたらちょっと理くつが合わないことになると思うことが、いろいろあるわけです。私は、ああいう修行はどういうためにやつてるのか、それは知らないけども、やつてると本当に物が見えてくるんだと思う。物が見えるつていうことは、一つ一つの物が正しく見えるつていうこともありますけど、それよりか、物と物との関係が、非常に明らかに見えてくるということです。物と物との関係が明らかに見えるということは、たとえば自分のもつ正在する知識、何億というたくさんある知識、その知識との間のかかわり合いのようすが非常にはつきりしてくるということです。そうすれば知識の意味の組み合わせをうまくやつて、いわゆる創造的なはたらきができるんですね。そして、知識もむだなものじゃなくなります。

物がちゃんと見えるつてことは、簡単にいうけども、本當はなかなか見えてないもんです。これは、見えてきて初めて、自分は今まで見えてなかつたということがわかるのですね。私なんか、もう六十五歳になつて、このごろだんだんよくものごと

のようすが見えてきました。この目の方は老眼でよく見えなくなつてしましましたけど、別の目の方はだんだん、見えるようになつてくる。そうすると、ああ今まではずいぶん見えなかつたつたなつて、そういう感じがするんですけどね。もちろん私が、お祈りまだとか、キリストみたいに、そんな立派な目を持つていいことではないんですが……。

私のところの塾を出た人たちで、学校の先生になつている人が多いのですが、そういう連中がやつて来ては、三十五歳か四十歳くらいになるとたいてい嘆いてますね。“教育ってものはできませんね。もう、もう本当に絶望です”なんて言います。十年くらい先生をやると絶望する人が多いですね。十年くらいやると、ようやつとのことでわかつてくるんです。それまでは自分で、なんとか少しうまい具合にやつて、教育ができるかななんて思つてゐんです。というのは、教育の根本は知識を与えるとか何とかということ以外に、もつとその以前に、人間の根本的な成長という課題があるということに、本当には気がつかないからです。ところが、十年もやつて、それに気づいてくると、自分自身の足りなさを感じてくる。この足りない自分じやと、とても人の子を指導するとか教えるとかはできない、ということを非常に強く感じてくる訳です。しかしこれは、人間というもののへの反省が深まつたということで、一面、少しものが見え、

子どもが見えてきたということでしょうね。ですから、その時こそ一生懸命真心をつくそうという工夫をしていくことが必要だと思います。

私はこれで、四十年間ね、こういう寺子屋をやってきましたが、ずっとと四十年間、絶望のしつばなしです。もう、本当に自分は教育をやろうなんていうことを考えたのが、そもそも敗因だなあと思うんです。思いながら、それでもやめられないでこやってきてる。どうしてやつてこられたのかと思うと、やっぱり、自分の力つていうようなことじゃなく、いろいろな教えだとか、先輩や、いろいろな人たちの、本気になつてはいた言葉が力になつてゐるのです。自分じゃ、一生懸命真心をこめた言葉をはつしようと思つていても、何かこうそこに知識のかけらみたいなものがくつついでいたり、本当にこの自分の心をはだかにして、それをぶつけていくつていうふうな、それだけの、あるいはまた、相手を見てそのまま、ありのままに見届けていくという力が、自分にはないということを、嘆きながらやつしていく、それが切実だと思うんですけども。

真心から生まれる言葉

情という世界を豊かにしていく。よく言われる、情緒とか、あるいは感情、高級な感情とか、そういうものを養っていくの

には、音楽とか美術とか、いうものが非常に大事だとされますけど、私は欲望についての自分の考へている体系からすると、それとちょっと違つるのが、言葉によつて養われる情性だと思うんです。人格つてものは、そういうものを全部ひつくるめた姿として考へられるんだろうと思います。その中で人間同志が、お互い同志が、本当に暖かい人間愛といつたようなものが養われるのは、主として言葉によるのだと思うんです。人間が真心からはいた言葉というものは、よくそれをくり返してみると何か共感するものが出てくる。洗練された人たちの感動したものを、それを言葉にした物を受けとつていくのが、この情性といふものを養つていく、一つの大きな道なんじゃないかと思うんです。

むろん、情性を養うつていうのは、生活の中で、家庭の中で、あるいは先生と生徒という直接接觸する集団の中で養われていくつていうことが、一番大事なことでしょうけど……。つまり、お互いに、まともに向かい合つてものを言い合い、生活するということが一番大事なんですけども、われわれ非常に至らない人間でありますので、その至らなさを何かによつて補なわなければなりません。それは、真心をこめ、情をこめたうたとか詩とかいうものが、大いに役立つと思います。このことは誰でも、自分の体験によつてうなずかれると思います。美しい詩、

本当にいい詩というものは、何かこう響きみたいなものがありますね。それに子どもたちも共感していくことが非常に多いと思います。そういうようなることによつて、いい感情に敏感な、豊かな情性が養われていくことになるのだと思ひます。感情といつても、くやしいとかにくらしいとか悲しいとかつていう暗い面の感情と、うれしいとか感謝とかいう明るい方の感情とがある。そういう明るい方の感情が敏感になつてくることによつて、もちろん欲望にも影響を与えます。エゴイスティックな欲望、つまり食欲とか性欲とか、またそれを確保するための財欲や支配欲などへの執着が弱まり、お互がもっと暖かく生きていくこじやないかという、そういう方面の欲求がするどくなります。そしてそれが養われていくことによつて、積極的に明るい、いいことをやりましようという方向にわれわれの気持ち全体が向かっていくもんだと思うわけです。

大変まとまりのない話で恐縮ですが、ただ、理くつや説明だとかお説教なんていうものでは、子どもにやる気を起こさせることはできない。やっぱり本当に、心を、お互い同志まともに向かって開きあつた時にこそ、いい成長をするものだということを、お話ししてみたかったわけです。大変どうもまずいお話を申し訳ありませんでした。

(小田原市はじめ塾)

シンポジウムのおしらせ

新学年を前にして「幼稚教育の原点をたずねて」のシンポジウムを昨年同様、つぎのように計画いたしました。お互に自らを新たにする努力を積み重ねたいと存じます。

日時 昭和四十八年三月二十四日（土）

講師 周郷 博先生 お茶の水女子大学教授、附属幼稚園長

遠藤悟朗先生 東京上野動物園、子ども動物園長

藤永 保先生 お茶の水女子大学教授

蕪木寿江先生 横浜市市ヶ尾幼稚園々長

司会 本田和子先生 お茶の水女子大学助教授

参加ご希望の方は葉書で、東京都文京区大塚二一一一、お茶の水女子大学附属幼稚園内みどり会研究部宛お申込み下さい。お返事はさしあげませんが、会費金五百円は当日受付へお出し願います。

コマオトシの教育

安藤美紀夫



私は、昭和二十九年に北海道へわたってから、十八年を北海道の東部で過ごした。

その間、時おり所用があつて、東京へ来たり、立ち寄つたりしたけれども、その時いつも感じたことは、どうして、まあ、東京の連中は、こうもせかせか歩かなければならぬのか、ということであった。こんなに大勢の人が一分一秒を争わなければならぬような大きな仕事を抱えているのだろうかと、不思議であった。

それが、今、私自身が東京に移り住んでみると、いつのまにか、その足なみに、自分の足なみがあつていて、今さらのように愕然とすることがある。

しかし、考えてみれば、このセカセカは、どうやら、東京だけのものではないらしい。私が十八年を過ごした北海道にしてからが、このセカセカの波を逃れることはできなかつたのだ。

私がいったころ、北海道の山は、とてもなく大きかつた。

夏山、冬山の造材で山からきりだされ、木材会社に積みあげられる原木の太さに、驚嘆した。樹齢二百年、三百年という老木が、雪をかぶつたままきり倒される情景を思いうかべたりした。ところが、それも、ほんの四、五年であった。きりだされる原木の太さは、見る見るうちにやせ細つていった。家庭で使うストーブも、まきの値段がばかに高くなつて、今までのまきストーブから、石炭ストーブに買いかえなければならなくなつた。私がいたのは、北海道の東部といつても、森林の町で、炭坑の町ではなかつたのに、そのありさまであった。

もちろん、植林はすすめられていた。伐採と植林が釣りあう永久林、などという言葉も聞いた。しかし、えぞ松やとど松がきられたあとに植えられた木は、たいていは落葉松であつた。落葉松の春は美しい。やわらかな緑の葉がつんづんつきたつた

風情は、たしかに、いい。だが、この木は二、三年で使いものになる木である。永久林とはいっても、二、三年周期のものにすぎない。

百年単位の周期から、十年単位の周期に、山が変わる。北海道の山が、年々小さくなっていく、という私の実感には、たいして狂いがなかつたのだと、そう思うことが、むしろ悲しい。

最近、ある新聞のコラム欄に「高校の多様化」というのがつた。要するに、文部省が進めてきたこれまでの高校多様化に対する疑問をまとめたものである。

「なぜ、職業高校は受験生にそっぽを向かれたか、さらに理由をさぐると、生徒の適性・能力に応じての進路の分化は中学卒業時では早過ぎる」という問題にぶつかる。」

「また、産業界は技術革新の進行が早い時代には、かえつて、

どんな職種についても応用がきく基礎的な学力を高校時代に身につけておいた方がいいと考えているのである。」

そんなことは、現場の教師たちには、初めからわかりきつたことであった。たとえば、中学を卒業する女学生のだれかが、秘書科にむくか、商業家庭科にむくか、などということは、だれにも判断できないことである。

また、すぐ役にたつ知識は、すぐ役にたたなくなることも、当然考えられていたことであった。

私は、こういう教育のやりかたを、「コマおとしの教育」と呼ぶことにしている。せかせかと動くコマおとしの映画を見るような、こういう教育がしつかりした実を結ぶとは、私にはどうしても思えない。

ひるがえつて幼稚教育を見る場合にも、せつかちな、このコマおとしの教育を、私たちは幼稚に強制してはいないだろうか。幼児の読書について、これまで、私は、いろいろな会で大せいの母親たちと話をする機会を持った。私は、そのたびに、もし、ほんとうに子どもに本を読ませなければ、その前にまず、子どもたちを外へ追い出せ、といつてき。多くの人はけげんそうな顔をした。私は、別に奇をてらつて、そんなことをいうわけではない。

外での遊びを知らず、仲間たちとの遊びを知らず、いたずらを知らない子どもが、もし本だけに熱意を持つとしたら、それはほとんど異常であろう。かりに異常ではないとしても、そういう子にとって本とはいつたまに何なのか、考えさせられてしまうだろう。たとえば、「ピノッキオの冒険」にしても、外での遊びやいたずらをたっぷり経験した子どもの方が、そうでない子

どもよりも、はるかに豊かに冒険を実感できる。ほぼ疑いのないところ、といつていいだらう。

しかし、大抵の場合、わが子の教育を熱心に考えれば考えるほど、目はそこから離れていくがちである。あげくのはては、絵本に絵があるということも忘れて、字だけを追っかけまわしたり、ひどい場合には、絵本が読めるか読めないかで、わが子の知能を判定しようしたりする。

小学校の国語教育でも、教科書のさし絵の貧しさは、見落とされてしまう。

そこには、「遊び」のコマを落とし、目を三角につりあげて、せかせかとつ走る教育の姿がある。少なくとも、私にはそう見えるのである。ルソーのあのおおらかなカリキュラムを、もう一度ゆつたりした目でとらえなおしてみることは、決して無駄ではないであろう。人間を忘れて、技術のみが非常な速度でつ走る時代だからこそ、なおいっそう、そのことが必要に思われる。

このあたりには、竹がないので、子どもたちは川辺から手ごろの枝を切ってきて、それに短冊や提灯をつるして遊ぶ。今年は、小中学校の肝煎りで、あちこちに子どものための花火の会があつたが、それは今年初めての試みであった。

たなばたの夜、子どもたちは集まって、手に手に小さな提灯を持ち、

「ローソク出せ、出せよう、出さねえと、カツチャくぞ」と、拍子をとりながら、戸毎をまわって歩く。カツチャくといふのは、「ひつかく」という言葉の意味である。

ひつかかれてはたまらないで、ぱくも、その夜は小さなローソクを用意して待つことにしている。

ところで、上笙一郎は「日本のわらべ唄」という本の中で、わらべ唄喪失のもつとも直接的な原因として、〈子ども集団〉の崩壊をあげている。そして、子ども集団の復興を訴えている。

もちろん、ここでいわれているのは、遊びの集団であることはいうまでもない。この、子どもたちの遊びの集団をこわしていったものは何なのか。

私は、十年ばかり前、「たなばた」と題する隨筆を、俳句雑誌に書いたことがある。その中で、私はこう書いている。

そのことを思いだしたが、もうおそかつた。

門口に集まつて、大勢で呼んでいる子どもたちの声を聞きながら、ぼくは、じつと息をころして、子どもたちが立ち去るのを待つていた。何か罪をおかしたような気持ちであった。

最近、子どもたちの父兄の中からそうしたユスリのようなま

ねはよくないという批判が出て、それは、だんだんなくなつていく運命にあるらしい。花火の会も、それをやめさせるための、ひとつ的方法であつたらしい。

ぼくなどは、花火大会などより、「ローソク出せ」の方がよほど面白く、そのようなユスリなら、喜んで受けいれるつもりであつたが、それが教育というものなら、どうにもいたしかたないのである。

そこにあつたのは、まぎれもなく遊びの集団であり、子どもたちの自然性に支えられたタテの集団である。私は、それを「ガキ集団」と呼ぶことにしている。

幼児教育の場合にも、横の集団の保育については、いろいろとすぐれた提案や実践報告を目によることができるけれども、タテの集団については、あまりお目にかかるない。私の不勉強もあるだろうが、そのへんの手うすさは、どうも否定できないように思われる。そして、現実に、あたりを見まわしてみても、

ガキ集団の存在はほとんど認められなくなつてしまつている。

遊びの継承と遊びの創造を中心とした、ほんとうの意味での幼児の学校は、このガキ集団にあるのではないかと、私などは考えるのだが。

ともあれ、北海道の山を小さくしたのと同じ発想による、せつかちなコマおとしの教育、それによつて失なわれたものは、あまりにも大きすぎる。ことに、幼児教育は、もつとゆつたり、おおらかに、と望むのは、もはや手おくれなのだろうか。

安藤美紀夫氏は皆さまよくご存じの、「白いリス」の作者です。

私はある日偶然に、ラジオでの「白いリス」の朗読と、作者の言葉を聞いて深い感銘を受けました。そしてこんな方に「幼児の教育」に何か書いていただきたいと、切に思いました。今回、念願がかなつてご執筆いただきました。

(赤間)

動物と遊んだ一日

十一月のある一日、私どもの園庭に動物のお客様を迎えた。

これは、ある動物を扱う会社から、数種類の動物を、一日借り受け、子どもたちに動物とのふれ合いを経験させようという新しい試みです。

私どもの園では、以前から、にわとり、兎、モルモット、おしどり、やぎ、その他小鳥などを飼いましたが、死んだり、野犬にとられたりして、今は、各保育室に、カナリヤ、文鳥と、園庭にわとりが数羽いるだけです。大学の敷地が広いためか、野犬には度々襲われ、その悲惨さは何ともいえないもので、すぐに補充する気になれません。

このような事情もあって、今回の試みがなされたともいえましょう。

子どもたちには前日に、来園する動物たちのことを話しておきました。チ



守 永 英 子

ンパンジーのさつちゃんのこと、ペペナナ、チコ、デコというヤギのこと、

カンガルーのホップ、ステップ、あひる、がちょう、ちやば、兎、モルモットのことなど。話して聞かせた時は、子どもたちは期待に満ちた顔でにっこりしました。

当日、子どもたちが大体登園したかと思われるころ、園庭の方がにぎやかになりました。大きい子どもたちは、着いたばかりの動物たちを取りかこみましたが、登園してきたばかりで、庭に出ようとして、その光景にぶつかつた三歳児のKちゃんは、保育室の前の階段に立ちすくんで叫けびました。

「みんなおうちにはいってないからいや！」やっと親の手から離れて、自由に遊べるようになつて数ヶ月の園内を動物達に占領された衝撃は大きいようだ。三歳児の中には、不安定にな

つて、保育者の手から離れるとべそをかく子どもの姿もちらほら見えました。やはり、日常の生活の中に動物がいて、子どもと動物との関係が段階を追って、ゆっくりと育っていくことが、子どもと動物とのふれ合いの本当の姿でしょう。

大きい子どもたちは、つなをつけてやぎをお散歩させたり、子やぎや兎、モルモットなどを抱いたり、手をつないであひるやがちようをとりかこみお散歩させたり、えさをやつたり、大にぎわいでした。

子どもたちの待望のチンパンジーは、係のおじさんに抱かれて登場、おじさんのおじさんに抱かれて登場、おじさんおじさんの差し出すセーターに自分から頭を入れたり、ズボンに足を通したり、着る気十分な所をみせて洋服をきると、園児と同じようにエプロンをさせてもらひ、おじさんの指図で、ひざを折つ

て正座し、皆におじぎをしました。係のおじさんにつけられ、ジャングルジム、すべり台、たいこ橋などを試みたあと、子どもたちと一緒に庭で食事。ナイフとフォークで上手に果物や野菜をたべるチンパンジーの前で、おかげを手でつまんでたべる幼児に、「お箸でたべましょう」と一こと。

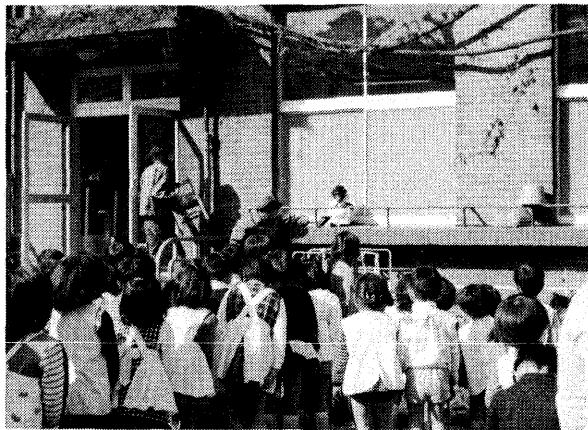
動物と園庭で一緒に過ごした一日、好きな子どもたちは、いつまでも、兎ややぎを抱いたり、えさをやつたりしていませんが、早くも動物たちから離れ、ふだんのように黙々と砂場を掘り返している子どもたちの姿に、「マネーネリズムの生活ではなく、驚きと感激のある生活」と焦る大人の気づかいとはうらはらに大人の目にはくり返します。

(お茶の水女子大学附属幼稚園)

自然や動物にふれることの少ない都会の子どもに、何かよい経験をと思う新しい試みではありました。しかし、その効果に関する見方はさまざまなります。動物を一日借りるその費用について、「高い」「安い」と反対の声が聞かれ、ものとその端的な表われと思われます。

狭い、コンクリートの箱の中に閉じこめられるような方向にある、都会の子どもたちの生活に欠けるものを補うために、いろいろな試みがなされることはよいことだと思いますが、保育の中には、必要な経験として定着するためには、思いつきを実行するだけでなく、その後の十分な検討が大切なことと思われます。

子どもと動物



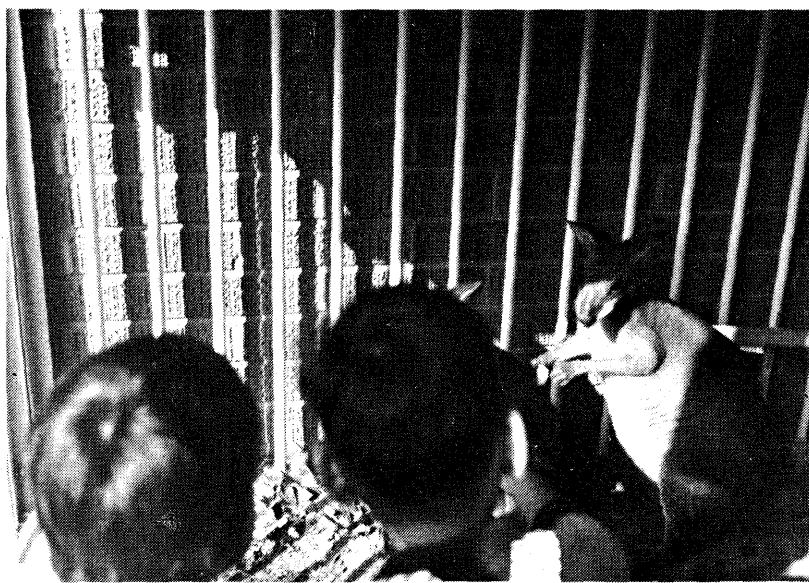
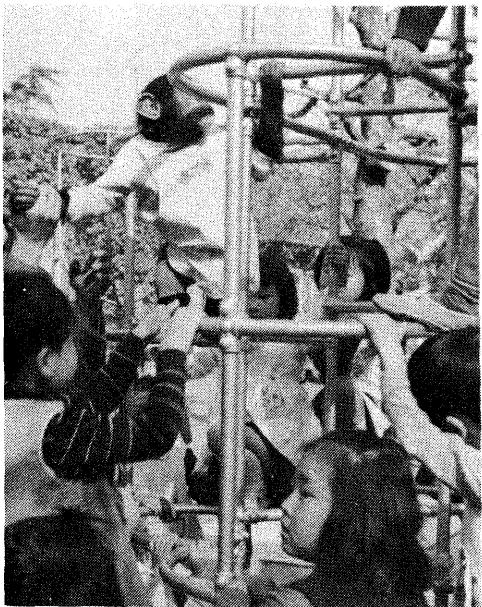
サッちゃん、おはようございます。



サッちゃん、遊ぼうよ

カンガルーは、日本へきたばかり
で、子どもがこわいんだって……
リンゴ、あげるよ

サツちゃんと一緒に



ヤギさん

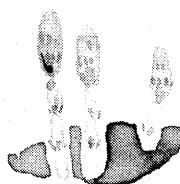
両方の手で、だいじにだいて
あげましょうね



すこし、くたびれちゃったわ

私の保育

中村美智子



カバン入れにも靴箱にも名前をはり終わり、子どもたちを迎えるばかりに準備の整った保育室内を、まだあちこち不安気に歩き回る。そのうちひとり、ふたり、五人六人としだいにふえてくる子どもたちと、さり気なさを装って「おはようござります」の言葉をかわしながら、互いに好奇の目を向ける。そんな出会いから、保育者としての私とクラスの子どもたちとの新しい生活が始まった。

五歳児二十九名。これが私の初めて担任したクラスだった。ベテランの先生と一緒に年少組を過ごし、それなりに園に慣れた子どもたちに接した時、保育技術もほとんどない新米の私は、何しろ彼らの中とびこんで共に遊び、暮らすより他に方法はないように感じられた。一瞬も早く仲良しになることを

望みながら、子どもの出すいろいろな遊びに懸命についてまわる。正直なところ、一学期のうち、子どもたちは私にとつてこわいぐらいの存在であった。

夏休みを終えると、子どもたちは驚くほど大きくなっていた。運動会に、学芸会にと、小学校とも関連した多くの行事を経験しながら、私は自分が保育者としての構えなどどこかへ吹き飛ばされた、ほんの少し大きな友だちとして、子どもたちにとり開まれていることを感じた。創造的、活動的な子どもたちは、一日を楽しく内外共に充実して過ごすことの天才である。多くの天才に開まれた毎日の生活から、徐々に保育者としての指導の芽を与えられつつ、最初の一年はまたたく間に過ぎた。そして無我夢中で過ごした時をあらためて振り返った時初めて、子

どもがかわいいものという感情が湧きおこってきたように思つた。

この四月に迎えた新入園児は、卒園していった子どもたちに慣れたばかりの私にはあまりに幼かつた。しかし母親に手をひかれて登園する彼らの目は、新しいカバンやスマックと同じようにはきらきらと光つてゐる。私はそこに今までの経験から得たものとはまた別の、せっぱつまつたような感激を覚えた。輝く目を受けとめる私の気持ちは全く新しいものであつた。そこで現在のこの四歳児クラス三十五人のこれまでの記録を読み返しながら、子どもたちの動きから感じた事を綴つていただきたいと思う。

★ ★ ★ ★

一クラスの人数が多いので、入園式後一週間だけ、クラスを半分に分け、二部保育を行なつた。これは園の先生方と事前に何度も話し合いをし、初めて登園する子どもたちにいくらかでもていねいに接することができるよう、という意図から行なう事になつたものである。

午前九時に十八人の子どもが登園する。カバンをおく所や、自由画帳やクレヨンなどのはいつているひきだしを、「Aちゃんのは青い自動車よ。ほら、ここにもひきだしにもちろんとつ

いているでしよう」と、ひとりずつ手をとつて教えていった。

ところがその間、子どもはただ黙つて私のあとをくついてくるだけである。早番の子どもが帰つた後、私は何だかとてももの足りない感じがして、そこで遅番の子どもたちが登園した時、少し方法を変えてみた。「Kちゃん、カバンはここにおきましようね。あら、何かついているわね」とその子どもの印となるものを指し、「Kちゃん、これと同じ印のついているひきだしあるかしら」と、こんどは子どもが自分で部屋の中を歩いて積極的に見つけられるようにした。もちろん、それでもどうしてよいかわからず、あらぬ方を見てつっ立つたままの子どももいたが、多くは意欲的に動き、同じ印を見つけてはうれしそうにっこりした。そんな子どもの表情を見て、私は保育者側からの一方通行だけでなく、小さいけれど子どもとも心を通じ合う接点をつけたように思つた。

室内においてあるミニカーやままごと、その他いろいろな遊び道具をまだ十分に使いきれない子どもたちは、何となくぎつしりとかたまつた感じである。じゅうたんをしいてままごとを出し、一緒にごちそなどとつくつて遊んでいて、途中で遅く登園してきた子どもを私が迎えにいつたりすると、遊びはそのまま中止され、もう戻つてきてもうまくは続かない状態だ

つた。それに、私自身が、始めのうちはできるだけ平等にどの子にも接しなければと思ったことから、結果的にはボツンボツンと切れた所にいる子どもたちの間を渡り歩くだけに終わってしまったことが多い。ある子どもと接しているときに、すでに、別の子どものところへも行かなければというあせりのようなものが働いていて、気持ちの上で時間をかけてつき合おうとうことが全くできなかつた。

自分のところから先生が離れていくてしまうと、それまでしていたことをやめて、勝手にひき出しから自由画帳とクレヨンをとり出し、絵を描き始める子どもがいた。最初は何となく手を動かしていたのかもしれないが、私が気がついて見ることには実に楽しそうに思いのままに描いている。体の中から発する自然なエネルギーが、そのまま手を通して紙面に現われてくるようを見える。そこには何の無理もなく、本当に自由な世界があるようだつた。クレヨンを握つておもしろそうにしている子を見て、それを真似て行動する子が出てきた。私がたつたひとつのこと気に気をとられ、あせつている間に、絵を描くという動きが連鎖反応的にたちまち広がつて、入園式後三日目ぐらいから、登園後しばらくの時間を自由画帳とつき合う子どもが多くなつた。

さまざまに描いている子どもたちの間をのぞくと、「先生！」これメロン」と黄緑のクレヨンでただグルグルとなぐりがきしたようなの得意そうに見せてくれた。「あら、そう、とても大きくておいしそうね」と言うと、「うん！」と元氣よくうなずき、「こんどはモモ！」と言つてピンクのクレヨンでまた同じように描いた。次々と描いては「先生！」と大声で呼び、ひとつひとつ見せてくれる。隣の子のをそつと見ると、「これね、でんしゃ」と小さい声で、それでもさもうれしそうに自分の描いた四角い絵を指さして説明してくれる。チューリップばかり描く女の子もいた。しかし、どのようなものにせよ、好きなように絵を描き、それを私に見せてくれる子どもたちの顔は、大変のびやかだった。そして子どもたちが進んで私に近づいてくれたことが感じられた。それから時々、自分でも描きながら隣で描いている子の顔を見たり部屋の中を見回したりする動きが見えはじめ、その機会をとらえて私がことばかけをすると、隣どうし、につこり笑つたり、自分から遊びたいものの方へ出ていくて、いろいろな道具を徐々に自分たちのものとする過程が見られた。こんな子どもたちのようすを見て、私は、無意識のうちに子どもが早く園に慣れてくることを形の上から急ぎすぎ、入園間もない子どもを的確にとらえていなかつた自分に気

付いた。そして、目前の子どもたちから逆に教えられた思いがした。

同じことを一日のうちに二度繰り返すことは大変であったが、前のやり方で反省した事をほとんど同じ条件の子どもにすぐ実践できた事で、特に、初めて新入園児を迎えた私には学んだ事が非常に多くあり、ありがたかった。

入園式後の一週間を終え、再びクラス全員が集まつての保育を始めた時、私は急に二倍にふえた子どもの数に対して少なからず混乱した。今でもとき折そうなる事がある。一日をどのよう過ごしかどうしても思い出せない子が、何人かは必ずといってよいほど出てくるのである。どこにいても目は配るよう心がけてはいるものの、まだ腰の重すぎる私で自分の体がなかなか思うようにはついてまわらない。そんなときにはせめ砂遊びにはついてまわらない。そこにはせめ砂遊びにはついてまわらない。そんなどと手に入れてもらつたりして、翌日、遊んでいるところへそと入れてもらつたりして、直接意識にのぼらせるほどの目を向けるようにした。そして反省記録を書く事にじと取りくむ事とした。これは、保育中によどもと対している自分はあまりに生々しいが、一日の保育をふり返つて子どもの動きなどを文字に表わす段になると、保育中とはまた別の目が生まれ、考える事ができるからである。



園のかわいらしの砂場は、ちょうど部屋の真前にある。室内の子どもたちがだいぶおちついてきたころをみはからつて、誘あわせて砂場に出た。日常生活をほとんどコンクリートで固められた中で送っているこの地域の子どもたちには、土や砂から得られる感触などごく縁の薄かつたものにちがいない。自分の前のほんの少しの砂をさらさらとこぼしたりすくつたりするのが初めであった。私がジョウロやバケツに水を入れて子どもの手の上や下にある砂にかけると、今までとは違つたしりした手ざわりに不思議そうであった。バケツのおいてあるところをいち早く見つけ、とんでいつて水を汲んでくる子、湿つた砂を何となく手にとつたりしているうちにおだんごができる子、砂のとられたへこんだ所を更に掘り下げていく子等々、それからは私のことばかりなどほとんど待たずに、すごい勢いで砂遊びは発展していく。「あつ、お水が流れてきた！」と言つてはあわててそこへ手を出し、元の方を見る。流れた水の筋から、また砂場というつながつた地面から、子どもたちは互いの存在を少しずつ確認し、共通の感覚を喜んだ。夢中になればなるほど、ことばのやりとりも少なくなるようだが、友だちとのつながりは逆に増していくようだつた。たいていの子にとつて、今や砂場は最も魅力ある遊び場となつてゐる。登園すると

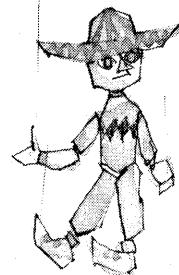
上はきもはかずにすぐ砂場用の靴をはき、「先生、ちょっとこ
れおいてきて！」とあわただしくカバンを私におしつけて、砂
場にとんでいく姿を見て、驚かされたこと也有った。お帰り間
ぎわ、私は毎日のように砂だらけになつた足をきれいにしてや
つたり、服をとり替えてやつたりすることに追われる。その時、
やつてもらう子どもの顔が清々しく、私の肩につかまる手には
満足した、たくましい力がこめられているように感じられると
とてもうれしい。そして、砂遊びが盛んになるにつれて、ま
ごとやいろいろな材料を使っての製作など他の遊びも活発に行
なわれるようになった。

★ ★ ★ ★

しかし、子どもたちが一日毎に伸びてくるのとは逆に、保育
者である私の動きが次第に消極的になつてしまつて、ほとんどの子が園生活に慣れ、そろそろ騒がしくもなつてきた
夏休みも間近のことである。その時は自分でも何だか変だと思
いながら、なぜそうなるのかがなかなかわからなかつた。そこ
で『幼稚園真諦』を繰り返し読んだり、研修会などで多くの先
生方のお話をうかがつたりしたが、そこから私は自分の動きが
小さくなつてきしたことについての解決の糸口が次のように得ら
れてくる気がした。子ども自身の遊びが活発になることを願う

私は、生き生きと活動していることが見られると満足感を覚え
てしまい、その充実した活動を更に先へ発展させるにはどうし
たらよいかと子どもに考えさせる役割をとることに欠けていた。
園に慣れ、存分に自力を發揮できるという、最初に私の目的と
したことが達せられる時期にきた子どもがふえるにかかわらず、
私の目は大部分がまだひとりで縮こまつている子の方に向きます
ぎていて、活発な子どもの活動が彼らに任せきりに近い状態に
なつていていたこともあつた。ある時、ある日は楽しく遊べても、
期間を通してみると系統的ではなく、断片的な遊びですごす毎日
になりがちであったのである。保育者は子どもの活動の前面に
出ではならないが、後にひつ込みすぎてもだめである。子ども
のもつ力は私が考へているよりも、きっと何倍も大きなものに
違ひない。その力を信じて、一步先が見える保育ができるよう
にならなければと思う。一日毎に自分の未熟さを思い知らされ
る現在の私であるが、恐れずに、子どもたちととけ合つた日々
を経験していきたいと願つてゐる。そしてそれができるには、
まだまだ努力のいる私もある。

幼児の観察研究——靴と幼児



津 守 真

子どもがしたり、いたりすることを、客観的な行動面だけで受けとのでは、そこで起こっていることをとらえるのに十分でないことを前回に述べた。行動は、子どもの側に起こっていることの表現である。おとな目の前には、未知なる子どもの世界が大きく口を開いて横たわっている。行動は、その世界がわれわれの目に映るような形であらわれたものである。おとなは、それを媒介として子どもの世界にふれるのであるが、客観的な行動の断片を寄せ集めて再構成しても、もとの形にはならない。そこで起こつていることの中心をなす重要な部分は、人が「感じる」ことによつて伝わる。ある場面に立ち会つて、人がある感動をうけるとき、その感動を中心にしてその場面は成り立つてゐる。人が自分の立場や知識にとらわれず、素直な心の状態で場面に立ち会うとき、そこで起こつていることの本質的

なことのある側面がその人の心に伝わつてくる。それは、その人の意志や意図によるのではなく、向う側によつて動かされるのである。「感じる」とか「感動する」とかいうのは、感じさせられ、感動させられるのである。観察においては、このことを無視することはできない。保育者としては、子どもにふれる場合にも、保育者の立場を離れて見ることのできる場合にも、生きた子どもの生活がそこにあるときには、迫力をもつてせまつてくるものを感じることができるであろう。それが何であるかを自分自身に明らかにするには、時間がかかる。しかし、子どもにふれるものにとっては、いたるところ、このような場面に満ちている。

前回に、たまたま、シンデレラごっこの中の靴の場面について記した。時計が十二時を打つて、シンデレラが急いで帰る途中、靴がぬげるところになると、子どもたちはシ

ンデレラにとびかかつて片方の靴をぬがせる。それから、みんなで大きわきして、いろいろの子どもに靴をはかせてみる。私はそこに立ち会つて、靴に示される子どもたちのもり上がつた関心を見いだして驚き、靴とは子どもにとつて何であろうかと不思議に思った。子どもの観察も保育も、私たちが出会つたところが出発点になる。始まりも終りも絶対的なものではない。どこからでも始まるし、これですべてをなし終えたという線があるのでもない。観察することができるのである。また、説明するのにはもつと他のよい例がありうる。たまたま、前回に、このシンデレラの靴の場面から始めたので、このことから考察を進めることにする。

子どもの観察例から考える

シンデレラの靴をみんなでぬがせて、その靴の合う人をさがす場面には何か人をひきつけるものがあることを、私はその場に感じた。子どもたちはその靴に特別の関心をもつている。その関心はどのような性質のものであるのか、子どもにとって靴とはどのような意味をもつものであるか。

靴を主題とする子どもの行動場面で、すぐに思い浮かべ

られる場面がその他にもいくつもある。それにも共通のが見いだせないであろうか。次にいくつかあげてみる。

●歩き始めのころ、一歳半か、二歳くらいの子どもは、縁側からすべりおりて、はだしで地面の上を歩いて、外に出て行く。外に行くのに、その子にとって靴は関係がない。

内と外との空間の性質の違いはあるが、靴をはくかはかないかを区別する仕切りはない。親はそのあとを追いかけて靴をはかせ、雑巾をもちまわつて足をふく。子どもは、いつのまにか、すっと出て行き、すっと入つてくる。その場にふれて感じられるものは、子どもが外に出て行こうとする外向きの意欲である。外に行こうとする意欲の前に、靴は姿を消してしまう。母親が追いかけてはかすとき、靴は社会的のわくを代表するものとなる。

●私の子どもが、はさまを使い始めたとき、一番最初に切り抜いたのは、靴の広告であった。(二歳ころ)姉がはいているのと同じ赤色の運動靴で、おひめさまのえがついている。まわりを大ざっぱに切つて、持ち歩いている。大きい姉と同じようなものを持ちたい、姉と同じようになりたいというような気持ちが、その靴の切り抜きに感じられる。

●付属幼稚園の砂場に、子どもは、はだしになつてはいる。

り、水を流している場面が、数年前よりしばしば見られる。素足の感じをしたのしんでいるように見える。私は少年のころ、海辺をはだしで歩き、砂浜をはだしで走った感覚を思いい起す。幼稚園で、靴をはいて砂場に入っているときよりも、一層いきいきした姿を感じる。

●保育室から庭に出る時、庭から保育室にはいるとき、子どもたちは背をかがめて、靴をはきかえている。その姿は、いく百たびとなく目に映っている。子どもたちは、幼稚園にきたとき靴をはきかえ、保育室から庭に出るとき靴をはきかえる。

●Kは、親が靴をはかせようとすると、靴をふりすてて、かけ出して庭に行く。その靴を水たまりの中につける。その靴をさくの外に投げする。おとなのはいている靴やサンダルをぬがせて、さくの外に捨てたり、水たまりにつけたりする。親は、Kが靴をぬいでいるのを見るたびに、靴のこと注意をする。Kは靴を社会の常識の代表としてみてそれに抵抗している。

靴というときに、すぐに目に浮かぶ靴と子どもの光景をあげるだけでも、いくつも並べることができる。まだいくつもあるが、いまは言外におくことにする。

おとなとしての体験から考える

おとなとしての自分自身についても、靴を主題とする場面は、いくつも思い浮かべられる。子どもの体験を間接に感じともよりも、自分の体験はもつと直接に感じられる。

●日常、外に出るとき靴をはく。あるいは、下駄やサンダルをはく。何かをはかないで外に出ることはめったない。庭いじりをするとき、海岸に遊びにいったときなどである。そのときはだしの感触を思いい起すことができるのである。快い新鮮な感じである。子どもが外にはだしで出たときには、自分もはだしになつて出てみると、他人から見られていないかという後めたさと共に、開放感がある。土に足がふれる快感のみでなく、外をはだしで歩けるという開放感、社会の束縛をはなれた開放感である。自然と一体となる感じであるのに対し、靴をはいて歩くというのは、自然から一歩離れることであるのを感じる。

靴と素足

●日常、外に出るとき、黒の革靴をはく、たまに、簡便な運動靴で街路を歩くと、学校に行くときと同じ路を歩いて、家の周囲を気楽に歩きまわる感じである。家の中に

いるときの自分自身の感じを保っている。

おろしててのいい靴をはくと、気分も新鮮になる。女の人の靴は、いろいろのスタイルがあるから、靴の違いによる自分の感じの変化も、多分、多様であろう。

靴の種類

- 大勢の人が靴をぬいで上がる集会にいったとき、同じような靴がたくさん並んでいて、自分の靴を間違えることはほとんどない。黒の革靴は、似たようのがたくさん並んでいるにもかかわらず、すぐに自分のとわかる。自分の靴がわかるというのは、形体や色だけによるのではなさそうである。

自分のではない靴をはいたときには、見ないでも、はき心地ですぐにわかる。自分の靴を見失ったときには、とても困った感じを体験する。それは帽子や外套を見失ったとき以上の困惑である。帰れなくなってしまったというような感じである。私は夢の中で、靴が片方なくなつた夢を見たことがある。また、靴が破れて、靴屋をさがしてまわつた夢を見たことがある。それは困惑した感じを伴つてゐる。靴は自分自身の一部分にくみこまれているようである。

- 日本では、外に出るときに、靴や下駄をはくが、室内

では靴をはかない。室内も、日本間ではスリッパをはかない。応接間にはスリッパをおく。便所には便所用のスリッパをおく。台所には、台所用のスリッパをおく。部屋の性質により、異なつた種類のスリッパをおく。スリッパの有無、性質は、部屋の空間の性質を代表するといえよう。

空間の性質

光景について

あるひとつの体験を思い起こすとき、その中での特定の時と場所の光景を思い浮かべていることがしばしばある。

ここにもすでにいくつかのべたし、また、後に述べるものも同様である。詳しくいうならば、その前後に多数のできごとや経過があるにもかかわらず、すべてがそのひとつの場面の光景に集約されているともいえる。そのひとつの光景が自分で選択されて出てくるには、その体験の全体の中で、自分が本質的と感じているものが自ら動いて形をつくる力を考へねばならぬ。あるひとつの光景を思い起している人にとっては、だれでもがその同じ場面を印象深く思い起こしていると思い、そのことを疑わないかもしれない。しかし、それは、その人の全体験の中から、その人にとって意味をもつて浮かび上がってきたことである。

自分の靴

体験は、生命過程そのものを、人の側からとらえたものである。とらえるというのは、すべて意識的なこととはかぎらない。体験の中には、その人に気付かれていないものが多くある。本質をなすものは、一瞬の中に感じとられることが可能であるが、それが意識の面に分析されて確認されるには、時間と精神力を必要とする。その前に、本質的なものは、自ら動いて形を作る力によって、ひとつの光景、あるいは風景となってあらわれるるのである。夢も、この意味での光景のひとつであるし、自然の風景も、人の精神とのかかわりなくしては考えられない。できごとの中にあらわれる光景もまた同様である。

ここで述べたことを逆にいうと、自ら浮かび上がつてきた光景はその人の体験に本質的なことをふくんでおり、そのことを手がかりとして考へることにより、人間の本質的なことあるいは原型にいきあたることができるのだということである。ただし、人がある時点できあたりうることは、あるところまでである。急いであせつても、どうにもならないものがある。そのことは、時間をかけていくなくならば、ある限界内でどこまでも深く下がっていくこともできるということを示すものである。

私は、靴のことを考へ始めたとき、靴屋の店先に立つてしばらくの時間を過ごした。第一回のときは、デパートの中の小さな靴屋だったが、人の足から独立して、だれにも属さない靴だけがたくさん並んでいることに、ふだんは靴に対して感じない異様さを感じた。それは、集会所の玄関にたくさん脱いで並べられた靴の群とは異なった感じである。下足箱に並んだ靴とも違う。また、靴はすべて二つで一対をなしていることに目がひかれた。

第二回目は、銀座の靴専門店のいろいろの靴の棚の前に立つた。そこは大きな靴屋なので、だれにもいぶかられないに立つていられるので工合がよかつた。そこで、私は、上等な黒の紳士靴の並ぶ棚の前で、立ち去ることができない感動を覚えた。それは、突如として、私を襲った。上等な紳士靴は男性の象徴であるという感じと重なってあらわれたのは、米国にいる私の親しい友人たちである。二十年前に、それぞれの家庭で知り合い、昨年久しぶりに再会した人たち、私よりも年長で、中年から老年に属する人たち、N氏、T氏、D氏、W氏、B氏、M氏、R氏……記していくと多くある。欧米人は家の中でも靴をはいている。靴は

自分自身の体験から考へる——靴屋の店先

その人のにおいと風貌を伝える。靴を通して、その人たち

の威儀と教養と友情が伝わる。立派な紳士靴は、はくためのものというより、西欧人にとっては、男性の一部である。

それから、婦人靴、イーブニングを着たときの白い靴、それからオーソドックスな黒いハイヒール、それも、ひとりひとりの米国の女性を思い起させる。主に、中年から老年の女性で、さきに名を挙げた家の主婦である。その靴とともに、それらの婦人たちの人柄が浮び上がる。

靴屋の他の靴棚には、珍奇な色や形の靴が多く並び、若い人たちが人だかりしていたが、私にはほとんど感興を起させなかつた。

靴にみられる文化と社会

日本では、家の中では靴はかない。靴は外に行くときにだけはく。汚い外、社会の眼にみちた外では、靴をはくことが要求される。戸外で靴をはくことは社会の常識である。

そのことは、西欧と対照的である。西欧では、家の内でも靴をはく。昨年、久しぶりで米国に行き、親しい家の居間に靴のままで入り、靴でじゅうたんを踏み、そこで歓談した。その光景が、靴とともに私の中に思い浮かぶ。靴のま

まで家に入った瞬間、私は西洋に来たことを感じた。西欧人にとっては、靴は洋服と同じように、いつでも人が身につけているものである。靴は、人格の一部をなしているともいえるし、その人のもつ文化の一部でもある。英文学のT教授を囲んで話したとき、西欧では、昔から、靴は身につける大切なものだったから、外を歩くときに昔は、上等な靴は、内ポケットにいたとすることを聞いたことが思いい起される。

日本では、清潔にしてある家の内から、外の汚いところに出るときに、靴を足にひつかけて出る。外を歩いて汚れた靴のまま家の内に入ることは、社会の常識として許されない。家の外に出るときには、靴や下駄をはくのも社会の常識である。

西欧においては、靴は人の一部でもあり、人のもつ教養や文化を象徴するものもある。靴の相異が教養や文化の高い低いをあらわすということではない。靴そのものが文化の中に入りこんでいるということである。日本における靴は、人の外側からの社会の規制を代表するものであり、靴のおしゃれも、外に対する見栄としてのアクセサリーの意味合いが強いといえよう。

- 歩き始めたころ、はだしで戸外に出ていった子どもの

あとを親は追いかけて、靴をはかそとする。ある場合に
は、かなり強制的に、ある場合には、子どもの選択にまか
せて。庭だったらはだしで歩かせておきやすい。門を出で
おつかいに行くときには、靴をはくことを強く要求する。
子どもは、あるときは、靴をはくこと自体にたのしみを
見いだす。またあるときは、靴をはくことが社会的に強制
される。また、家に入るときに靴をはいていると、ぬぎな
さいといわれる。その強制は日本では絶対的であり、外を
靴で歩くよりもっと強い要請である。西欧人の場合には、
この点は全く異なる。一度はいた靴は、家の外でもはきつ
づける。日本の場合には、靴は、内と外とを区別するもの
であり、靴は外の汚いところを歩くためのものである。靴
をはいてさえいれば、それが自分のであろうと、他人ので
あろうとかまわない。西欧人の場合は、一度はいた靴は、
自分の靴であり、自分の足もある。

● シンデレラの物語の中で、シンデレラの靴が片方ぬげ
て、あとに残されるとき、その靴には、その人の体臭が残
っている。靴はその人の一部である。その靴が合う人をさ
がすというのは、寸法や形の適合性だけのことではない。
人そのものをさがすのである。その靴をはいていた人格そ
のものをさがすのである。西欧における靴の意味を考え

きて、そのことはかなり明瞭にいえると思う。
日本の子どもがシンデレラの劇をあそびながら、靴の場
面に大きな関心をもつ。日本の子どもにとつて靴のもつ意
味もそれなりに大きく、その生育過程では靴をめぐってさ
まざまの体験をしてきてるので、ここでもシンデレラの
靴に关心を示すのはむしろ当然である。同時に、子どもた
ちは西洋の物語の中にこめられている靴のもつ意味を、こ
の劇あそびを通して、体験しているともいえるであろう。
物語による体験と実際の体験との相異については、さらに
考察を加える必要がある。

● 現代の日本の子どもの靴には、運動靴が多い。ゴムと
ズックでできており、最も安価で簡便である。汚れたり小
さくなれば、どんどん捨てる。だれのでもかまわずにか
せることもある。便利である。しかし、そこに、現代の日
本人の靴に対する感覚の特殊性があるのでないだろうか。
内と外の区別をする役を果たしさえすれば、できるだけ安
くて便利なものを子どもに与えておけばよいということ。
日本のはきものには、下駄もあり、草履もある。革靴を
はくようになったのは明治以来のことであろう。下駄や草
履は、日本人にとって、靴とは違った意味をもつてゐるの
であろうか。日本人にとってはきもののもつ積極的な意味

を考えるには、もっと別の観察をつまねばならぬ。他方現

代の子どもは、はなおの下駄をはけなくなつてきている。

下駄や草履よりも、ビニールのサンダルを好む。日本の子どもが、昔ながらの下駄をはけなくなつてきているということは、日本人としての感覚を失いつつあることにはならないだろうか。はきものだけのことならそれでもよいのかかもしれない。しかし、革靴、運動靴、下駄、サンダル、草履など、現代の日本人のはきものは、他の国に見られないほど多様でありながら、社会の常識にかなつて、安価で便利で、見たところがきれいならよいという性質が強い。その性質は、日常生活や、教養のすべての面についてもいえるのではないかと思う。子どもの教育についても、文化の質は問題にされず、現在の社会生活の表層にあわせてしか考えられていないことが多いのではないか。

シンデレラの靴から始まり、その他、靴を主題とする子どもの行動場面について、そこで感じとられることを中心として、それは何であるのかを考えようとした。靴についての観察例はまだ多くあり、そのあるものはここに述べたものとは異なる性質のものである。考察すべき残された材料は数多くある。

ここにみた限られた材料の中から、子どもにとり、靴とは何であるかをもう一度考えてみると、靴は、社会または文化と関連が深いよう思う。シンデレラの靴は、シンデレラという人間の一部をなしており、落とした靴は、舞踏会にいくための特別たいせつな靴である。靴が特定の人を代表するということは、その人のもつ教養や文化をふくめて全人格を代表するということである。私がここでいう文化とか教養とかいうことは、人がいきいきと生きていく生活の中から生まれてくるその人の人間らしい精神というようなものである。知識や才能のみに限らない。後になるとそれと関連が出てくるが、その根底となるようなものである。英語では、教養も文化も、カルチャー Culture であり、土を耕すことを意味する。耕した土の中からこそ芽が出てくる。すなわち、生命過程の中からそれを養い育てることによって生まれ出る人間の精神が文化である。シンデレラの生活の中には、子どもがひきつけられる人間性がある。子どもたちはそのシンデレラに愛着をもち、シンデレラの靴は、その全人格を象徴するのである。

社会もまた、本来、人が他人に対し示す関心のひろがりであり、生きた人間の人格と切り離すことはできない。しかし、しばしば、社会の規制や常識の面のみが切り離さ

れて、人に強く意識される。日本の子どもにとつて、靴は、しばしば、その面での社会を代表するものとなる。ゆえに、靴というと生活習慣のことしか思い浮かべない考え方が出てくるのである。

たまたま靴の観察から始めたのであるが、そこから始めて、ならばならぬ理由があつてそうしたのではない。保育者として、また、第三者として子どもにふれるところには、どこにでも、子どもの世界が開かれている。その直接の経験を手がかりにして、それは何であるかと探っていくところに、子どもの世界の理解ができるいく、素材は無限に近く、われわれの理解はまだ表層にとどまっている。

子どもと靴という小さな一つの場面をとり上げてみても、子どもにとり、靴はさまざまな感じ方をもつて体験されたりすることを述べようとした。私はこのことを保育研究会で話したところ、そこにいる人々の靴の体験の中の光景がいくつもたちまち提出された。そして、幼稚園で生活習慣の問題というとかならず靴のことが出てくることが何人もの人から語られた。靴をひとつとってもなお多くの課題が残されている。私共はその門口に立つただけである。

(つづく)

幼児の教育 第七十二巻 第三号

三月号 定価一〇〇円

昭和四十八年二月二十五日印刷
昭和四十八年三月一日発行

112 東京都文京区大塚二ノ一
お茶の水女子大学附属幼稚園内

編集兼
発行者 津 守 真

112 東京都文京区大塚二ノ一
お茶の水女子大学附属幼稚園内
発行所 日本幼稚園協会

東京都板橋区志村一ノ一
印刷所 凸版印刷株式会社

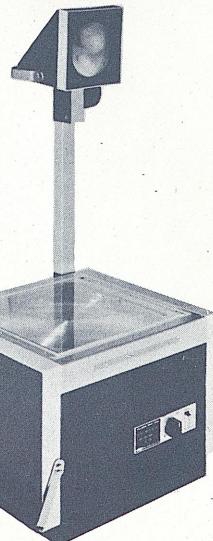
101 東京都千代田区神田小川町三ノ一
発売所 株式会社 フレー贝尔館
振替口座東京一九六四〇番

◎本誌御購読についての御注文は発売所フレーベル館にお願いいたします

卒園記念に最適です!!

フジックス OHP 700

幼児教育界をリードするフレーベル館と富士フィルムの提携!!



本体——— 63,000円

別売付属品

フジックスロールキャリア——— 4,900円

フジックスプロジェクションランプ——— 3,500円

《仕様》

レンズ f=350mm 2枚構成

投影距離 1.5m~3.0m

電源コード 本体固定式長さ5mコードポケットに収納

寸法・重量 360×310×560(映写時740)mm・9kg

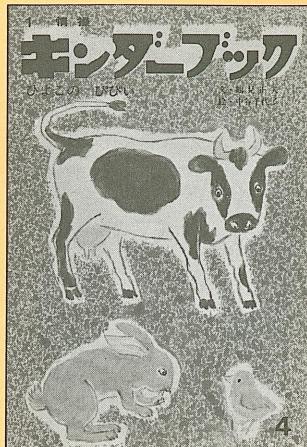
《教育的特性》

- 明かるい部屋で、鮮明に投映できます。
- 近距離から大きな映像が得られます。
- 説明者は学習者と向かいあって、資料を提示できます。
- 学習のねらいに既したTPの自作が容易です。
- 操作がきわめて簡単です。

やささまの成長にあわせてお選びください

4月号・フレーベル館の5大月刊保育誌

情操をゆたかにし、創造力をのばす

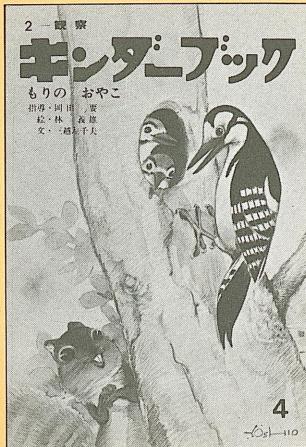


キンダーブック ①-情操

A4判・20頁・多色刷 つばめの
おうち こいのぼり 特別付録

団体購読価100円

観察の眼をそだて、心情をゆたかにする

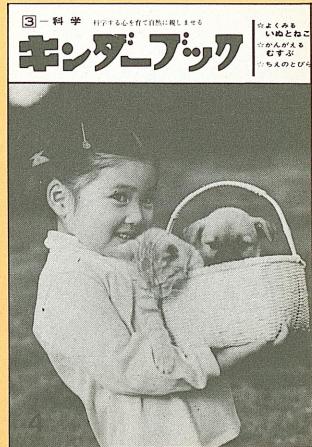


キンダーブック ②-観察

A4判・36頁・多色刷 つばめの
おうち こいのぼり 特別付録

団体購読価130円

科学する心をそだて、自然に親しませる



キンダーブック ③-科学

A4判・36頁・多色刷 つばめの
おうち こいのぼり 特別付録

団体購読価130円

幼児の心を育てる

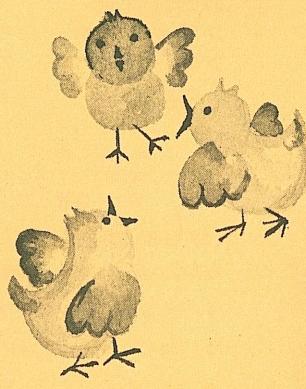


キンダーおはなしえほん

L判・36頁・多色刷 こいのぼり
特別付録

団体購読価130円

園児をもつ母親の専門誌



ホームキッダー

L判・100頁・多色刷 特別付録

団体購読価100円